

丹波



関西丹波市郷友会会報

第2号 2017.11.1

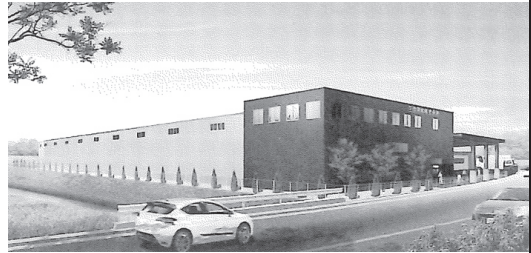
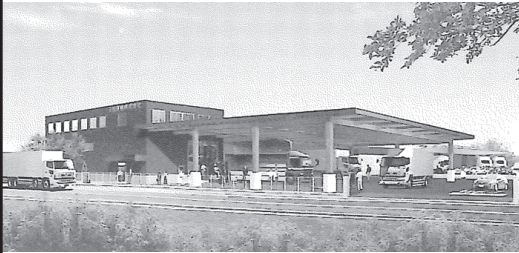
三協運輸 株式会社

本店住所 埼玉県桶川市坂田字向 990-1

創立 30 周年を迎え、お陰様でつつがなく発展しております。

東海道を中心に大型トラック約 200 輛
最新鋭設備を備えた物流センター及び倉庫約 12,000 坪
を軸に毎日フル稼働の体制で活動してまいります。

〔安全・安心・朗らか〕を旗印にご期待に応えて参ります。



本店 社屋（敷地面積 4,000 坪、建物面積 2,000 坪）平成 23 年 10 月 1 日完成



関東発一関西行の風景

出発直前の大型トラック部隊
毎日 200 台の車輛群が東海道を
中心に走っております。

〔主要取引先〕順不同

ダイキン工業(株) キリンビール(株) 味の素(株) ハウス食品(株)

キューピー(株) アサヒビール(株) 帝人(株) 三菱商事(株) 日立化成(株)

三井化学(株) 横浜ゴム(株) (株)東芝

三協運輸 株式会社

代表取締役会長 岸本勲（氷上町出身）

本店 埼玉県桶川市坂田字向 990-1 TEL.048(728)9380

E-mail:sankyounyu_saitama@h6.dion.ne.jp

本店配車センター 埼玉県桶川市坂田字向 990-1 TEL.048(729)0466

物流倉庫所在地 東京・埼玉・神奈川・名古屋・大阪

たなば

関西丹波市郷友会会報

第2号



目 次

生まれ変わりました	有田秀雄	3
黎明館でにぎやかに 第106回総会		4
新人大会の優勝旗寄贈 保護者への報告	宮垣祐司	8
田艇吉兄弟と法貴発	荻野祐一	9
生家を地域活性化の拠点に	上田正三	13
アンテナ増設、ほぼ全域カバーへ	足立宣孝	16
私と関西丹波市郷友会	池畑廣士郎	19
丹波市を変えましょう	谷口進一	21
日本の良き文化伝えたい	中川真貴	24
ヒマラヤの絶景と高山病	臼井隆夫	27
二葉ゆゆさん、颯爽と	山口直樹	31
市俳句協会設立と今後の事業	足立頼昌	33
片山桃史の生と死〈上〉	一色哲八	35
母との時間	竹村公作	41

書とデザインのほざまで	荻野丹雪	43
落語家になって20年	笑福亭由瓶	46
胸ときめかせた柏原劇場	清水雅子	48
夏休みの墓参り	芦田敬一	50
「利他」教えてくれた恩師	吉見弘文	53
日本昔ばなしと世相	清水昭景	55
さまざまな国境を歩く	山口直樹	58
100年後の子らに届けたい	近兼拓史	62
常勝寺の鬼こそ	足立壽宏	65
編集後記		67
広告目次		68

題字 (表紙・中扉)	荻野丹雪
写真 (表紙ほか)	足立壽宏
カット (中扉ほか)	足立進

生まれ変わりました

関西丹波市郷友会 会長 有田 秀雄

昨年の11月6日(日)、第106回関西丹波市郷友会総会は、丹波市柏原町の「たんば黎明館」で開催いたしました。

司会者の紹介により演壇に立った時、郷友会は生まれ変わったと思えました。二階の会場は超満員で床が抜けないかと心配する程の盛況でした。今まで関西丹波市郷友会の主旨は良いが、何となく敷居が高いと言われておりましたが、徐々にではありますが、親しまれる愛される会になって来たと嬉しくなりました。

風は風に向かって行くからこそ高く上がります。風に流されていては上がっていきません。逆境の時こそ志を高く持たなければなりません。

郷友会の仕事はシアター(劇場)運営

や映画製作に共通するところがあります。主役は勿論、日本の将来を担う丹波市在住の青少年であり、主役が文化、スポーツ、国際交流、ボランティア活動などの分野に伸び伸びと活躍できる場を作ることが私達の役目です。如何に良いシナリオを書き、良くプロデュースするか

が大切です。無論、会員相互の親睦も大事ですが、本会の第一の目的を常に忘れてはいけません。そして、「温故知新」、郷土の古き良き伝統を守りながら、新しい時代に即したイノベーションを興さなければなりません。

2年後の2019年は、本会創設120周年の記念すべき年です。大いなる目標に向かって「今、丹波市がおもしろい!今、郷友会は楽しい!」のキャッチフレーズのもと丹波市と共に邁進致します。



黎明館でにぎやかに

第106回 関西丹波市郷友会総会



たんば黎明館前での記念写真（撮影＝監事 足立壽宏）

平成28年11月6日（日）、丹波の山々の木々は紅く色づきはじめ秋の到来を告げています。関西丹波市郷友会が、初めて丹波市で総会を開く日です。「郷友会は新たに生まれ変わります」を合い言葉に、郷友会会報「たんば」の創刊、そして今までとは違った総会を準備してきました。新企画は柏原町のたんば黎明館での開催のほか、荻野祐一丹波新聞社社長による丹波の偉人の講演、出席者によるスピーチ、チャリティくじ引などです。11時に始まり、午後の懇親会、15時30分まで、盛りだくさんの1日です。

会長の有田さんは、郷友会は楽しく、色々なことに挑戦していくと挨拶されました。

来賓の辻市長は12月で12年間の初代丹波市長を退任されます。郷友会総会が始めて丹波市で行われることに感謝され、黎明館の思い出を披露されました。その後、出席者全員で、盛大な感謝の拍手

をしました。

荻野さんは当会の設立者の田艇吉とそれにつわる人々（法貴発、小島省齋、田健治郎など）について話されました。最後に福知山線の阪鶴鉄道開設に尽力した田艇吉、その鉄道の国有化法案を企画した田健治郎兄弟を対比して、「艇吉は地元のため、健治郎は国のため」という健治郎の孫の元参議院議員の田英夫さんの言葉を紹介されました。

丹波市中学校体育連盟の新人戦の優勝旗6旗を、それぞれの代表者に贈呈しました。ことし第40回の定期演奏会を開いた丹波市少年少女合唱団に祝儀を贈呈しました。総会では5曲のすばらしいコーラスが演奏されました。

午後の懇親会は来賓の石川県会議員の乾杯で始まりました。

たんば黎明館内のフレンチ料理店ル・クロの地元産野菜を使った料理を味わいながら、会話も弾んでいました。

続いて有田さんが、会報「たんば」の創刊でお世話になった人々、特に来賓の荻野丹雪さんに謝意を述べました。荻野さんはサントリーの「響」や大河ドラマ「新選組」の題字などで著名な春日町出身の書道家です。今回、会報のすばらしい題字「たんば」を書いて頂きました。ひらがな単独で書く事は少なく、最初は戸惑ったとのことでした。

それに続いて新会員紹介があり、今回は同伴者を含め40人という、多くの紹介となりました。

大槻さんはホームステイで柏原高校に短期留学中のビヤムバサイハン・ナムーングレスさんを紹介されました。彼女は流暢な英語の自己紹介で、モンゴルでの学年飛び級の片鱗をみせてくれました。

スピーチは4人の方々です。

FM805丹波の足立宣孝さん、神戸市在住で春日町の実家で「丹波の手仕事展と本上田邸」を開催している上田正三

さん、大学卒業後、丹波市で活躍中のインターンの田代春佳さん、歴史ある柏原八幡神社の千種正裕さん。

くじ引のお金は辻市長に手渡されました。景品は出席者持参の57品です。

「ふるさと」を全員で合唱をし、「今日の皆さんは生き生きとされています」との田恭子さんの閉会のあいさつで幕を閉じました。

（記 芦田敬一）

6、7ページに会場風景



①

- ① 丹波市少年少女合唱団の歌声に聞き入る会員ら
- ② 開会のあいさつをする有田会長
- ③ 歌う丹波市少年少女合唱団
- ④ 中学生に優勝旗を寄贈
- ⑤ 田兄弟について講演する荻野丹波新聞社長
- ⑥ チャリティで集めた寄付金を辻丹波市長（左）に渡す
- ⑦ くじ引きの景品にっこり
- ⑧ 閉会のあいさつをする田副会長

（撮影＝常任理事 野村忠利）



②



4



3



6



5



8



7

新人大会の優勝旗6本を 寄贈いただきました

保護者への報告

丹波市中学校体育連盟会長(28年度) 宮垣 祐 司

日頃は、各校部活動に對しまして、ご支援ご協力賜っておりますこと心より感謝申し上げます。3年生は部活動を引退し、進路に向けての取り組みが本格化してきます。2年生1年生は夏休みから新チームとなり、9月下旬の新人大会に向け一生懸命活動しています。

さて、丹波市中学校新人大会は9競技16種目によって争われます。したがって優勝旗は16本あります。平成16年に氷上郡から丹波市となりましたが、優勝旗は、その後も「氷上郡新人大会」のまま継続使用してきました。

総合体育大会の優勝旗については、平

成26・27年度の2年間で関西丹波市郷友会様のご厚意によりすべて新調していただきました。新人大会についても、氷上郡のままであると申し上げたところ、引き続き3年間にわたって新人大会全16種目の優勝旗全てを「丹波市中学校新人大会」と名の入ったものに新調してやろうという申し出がありました。重ね重ねのご厚意、本当にありがたく思っています。

関西丹波市郷友会様は、ご存じのとおり丹波市出身で関西において、起業され活躍されておられる方々による組織であり、丹波市の青少年のスポーツ活動や文化活動に対する支援を主な活動とされて

います。これまで長年にわたり多くの青少年団体や個人に対して、優勝旗や活動費などの援助をしていただいています。そのことにより、近畿や全国に羽ばたいていった子どもたちは数多くいます。本当にありがたく感謝しているところです。

今年度寄贈いただきましたのは、陸上競技(男女総合・男子総合・女子総合)、軟式野球、ソフトボール、サッカーの6本です。今年度の新人大会より使用させていただきます。開会式で披露させていただきますとともに、広く保護者の皆様にもお知らせすることをもち、感謝の意を表したいと考えます。新チームとなる2年生1年生が切磋琢磨して大きく羽ばたいてくれることを期待し、お知らせします。

今後とも、丹波市中学校体育連盟の活動にご支援ご協力いただきますようよろしくお願い申し上げます。

平成28年9月

田艇吉兄弟と法貴発

国のため、地域のため尽くす

丹波新聞社社長 荻野 祐一

明治23年（1890）、我が国で初めて行われた第1回衆議院選挙で、丹波では2人の有力者が激しい戦いを繰り広げた。2人はどのような志を抱いて、衆議院選挙に立候補したのか。選挙後のそれぞれ



JR柏原駅前に建つ田艇吉像

の歩みはどうだったかなど、2人を通して丹波の黎明期の一側面についてふれたい。法貴発は、弘化3年（1846）、篠山藩の足軽の家に生まれた。秀才のほまれが高かった発は、19歳で幕

府の学問所である昌平校に派遣された。明治5年、大蔵省に採用され、さらに福岡県幹部に転任。今でいうなら福岡県の副知事クラスにのぼりつめたが、肺を患い、明治11年に辞職。篠山に帰郷した。翌年の8月、発の人生を大きく変える「演説禁止事件」が起きた。

篠山市立町の尊宝寺で演説会が催され、発も演壇に立った。国会開設の必要性を訴えたこの演説は、警察を通して県に報告され、「今後、兵庫県内で演説することを禁じる」との命令を受けた。この事件をきっかけに、法貴は自分の軸足を「官」から「民」に移し、自由民権家として活動を開始することとなった。

演説禁止の処分には納得できない発は、新聞社に投書し、世論に訴えた。東京で発行されている朝野新聞の論説にも取り上げられ、「演説禁止は現世における地獄の法」と、演説禁止を批判した。さらに発は、「国安論」という著作を発表し

た。演説禁止の理由を県当局が「国安妨害」としたのに対抗したもので、この著作の中で発は、「国安とは、我が国の人々が穏やかな幸福を味わえること」と定義。「法律や政治、経済を論じ合うことは国安にかなうことである」として、言論活動を国安妨害という理由で禁じるのは間違っていると主張した。

明治13年、篠山に「自治社」という結社をつくり、国会開設を政府に要求。明

治15年には、自治社を母体に「自治党」を結成し、演説会を開催するなど、反政府活動を展開した。

自由民権運動は草の根的に全国に浸透した。明治7年から17年までの間に1275を数える結社が生まれ、会員数は4万人から6万人と推計されている。「自由か死か」「我に自由を与えよ。然らずんば死を」。そんな言葉に全国津々浦々の若者が燃え上がった。こうした自由民

権運動の広がりにより国会開設されることになった。

国会開設の実現を求める発にとつて、明治23年7月に行われることになった第1回衆議院選挙は待ちに待ったものであり、勇躍、名乗りを上げた。

田艇吉は嘉永5年（1852）、柏原町下小倉に生まれた。のちに台湾総督や通信大臣、農商務大臣などを歴任した弟の健治郎は、その3年後に生まれている。

幼い頃、わんぱくだった健治郎と違い、艇吉はひ弱だった。艇吉がけんかに負けたときは、健治郎が代わって相手をしたという。また兄弟にはこんな逸話がある。2人が家の庭で遊んでいたある日、屋根裏に巣ごもりしていたスズメを見つけ、艇吉がはしごをかけて捕ろうとしたところ、いたずら心を起こした健治郎がはしごを取り外して転落させた。この逸話は、のちの2人の巡り合わせを暗示しているのだが、それは最後に譲る。

父親は書をよくし、古楽にも通じていたが、いささか度が過ぎた嫌いがあり、家のことを顧みなかった。このため2人の養育は母親の肩にかかるところが大きかった。2人の教育について親族は、「寺子屋以上の修業は無益」と主張、そのい



篠山市・王地山公園に建つ法貴発の記念碑

い例として父親を引き合いに出した。

これに対して母親は、「今日の世の中は無事泰平ではない。こんな時節には忠孝節義の精神を養うのが肝心」と応じた。そんな母親の方針で艇吉は12歳の春、青垣町にあった小島省斎の塾に入門した。省斎はのちに柏原藩の儒者になり、窮乏していた藩の財政改革に取り組む一方、藩校の崇広館をおこすなど、教育に力を入れた。識見の高さや高潔な人柄から「丹波聖人」と言われた。有名な言葉に、「名利の一念、心上に留ませば、天真束縛せられて自在なるを得ず」がある。

省斎の元で学んだ艇吉は19歳で村総代となり、その後、上京。警察の世界に足を踏み入れ、千葉県の県警警部となったが、長男ということもあり、帰郷し、27歳で県会議員に当選。水上郡長ともなった。

水上郡長として手腕を発揮した一つ

が、明治16年、3年の年月をかけて完成した明治の鐘ヶ坂トンネルである。このトンネルは日本で5番目のトンネルで、レンガ積み工法としては日本で初めてのものとされている。総工費は約4万円。そのうちの3分の1を寄付でまかした。今のお金に換算すると、寄付金額は約3億円らしい。

トンネルの開通で、丹波地域をさえぎる鐘ヶ坂峠の交通難所は解消した。しかし、依然として阪神地方との行き来には不便をきたしていた。

当時、日本海に臨む舞鶴港と京阪神を結ぶ鉄道は、軍事面や商品流通面からも早急な建設が望まれていた。この時勢に艇吉は、阪神地方から水上郡を経て舞鶴を結ぶ鉄道を敷設することを考えた。しかし、軍部は、路線の基点を大阪にするのと、敵艦隊の来襲を受ける恐れがあるとして、京都と舞鶴を結ぶ路線を優先するべきだと主張。この壁を突破するには政

治力しかない」と、艇吉は第1回衆院選に名乗りを上げた。

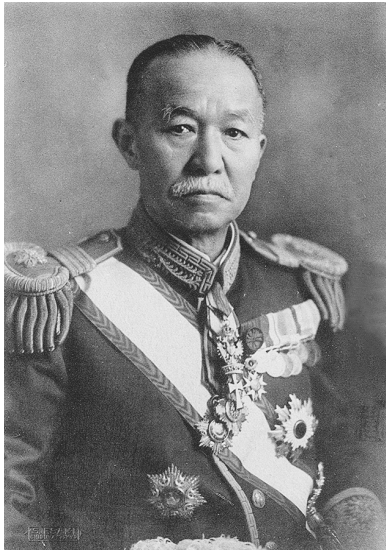
第1回衆院選は、水上郡と多紀郡を一つの選挙区とする、文字通りの小選挙区で、艇吉と発のほかに有力3氏の5人が立候補した。3氏とは、篠山の大山村の大庄屋・園田多祐と、篠山の福住出身の自由民権家・山川善太郎、柏原藩士の家の生まれのちに県会議長を務めた飯田三郎である。そうそうたる顔ぶれだった。

この選挙で、一票を行使できる有権者は限られていた。まず25歳以上の男子であること、さらには15円以上の直接国税を納めている者と、厳しい制限があった。このため、丹波地域でその資格が持てたのは1807人に過ぎなかった。

選挙戦は熾烈を極めた。昼夜の別なく各地で演説会が催され、戸別訪問も当然のこと。夜には、若い者が村境に詰め、松明をたいて他陣営からの切り崩しを警

戒した。篠山警察署福住分署から本署への報告には、「田艇吉は金力を以って、法貴発は諸方に書面を発送し、山川は諸方において演説をなしている…之を称して『田の金力』『法貴の書面』『山川の演説』と風評するありさま…」とある。発の支持者が、ほかの候補者の演説会場に押しかけて大声で雑談し、演説を妨害したという記録もあるなど、選挙戦はエスカレートした。

投票は7月1日に行われ、発が601票を集めて当選。艇吉は420票の次点



田健治郎

で涙をのんだ。見事当選を果たした発だったが、その感激もさめやらぬ8月、再び肺の症状が悪化。病床に伏し、初議会にも登院できない容態になり、国会に思いをはせながら、その年の12月に死去した。翌年、補欠選挙が行われ、艇吉が当選した。

阪鶴鉄道（今のJR福知山線）を敷設するために代議士となった艇吉の思いは実を結び、明治32年、柏原―福知山間の工事完了で全線が開通した。阪鶴鉄道開通の陰には、古市村に駅をつくってくれるならばと、篠山市大沢に所有していた土地を無償で提供した古市村の大庄屋、小林常三郎らの献身があった。その大沢の土地に今の篠山口駅がある。

こののち阪鶴鉄道の3代目社長となった艇吉だが、明治39年、「鉄道国有法案」が可決された。阪鶴鉄道も国有化の対象

になり、社長の艇吉は陳情書を政府に提出。買収から阪鶴鉄道を除外してほしいと訴えたが、その願いは届かず、国有化され、国鉄福知山線に名前を改めた。

この法案の文案作成にあたったのは、日本経済の発展のために国有化を決行するべきと、鉄道国有説を持論とした逄信次官だった。艇吉の弟、健治郎である。

幼少時の逸話ながら、はしごを外された艇吉だったが、一人は地方の発展を願い、もう一人は国の将来を考えていた。二人が身を置いている立場は違っていた。健治郎の孫で、政治家の田英夫さんに以前、電話で取材したことがある。そのとき、英夫さんは「艇吉は地方のため、健治郎は国のために尽くした政治家でしたね」と語っていた。的確な指摘であろう。

（28年度総会での講演より）

生家を地域活性化の拠点に

丹波に〴〵孫ターン〴〵して

上田 正三

今は、現住所の神戸市東灘区と本籍地の丹波市春日町棚原を行ったり来たりして、都会と丹波の良いところ取りをした生活をしています。

のですが、小学生時代、学校の休みには必ず祖父母の家（春日町棚原）に遊びに帰って、丹波の自然の中で遊び、育ててもらったよき思い出があります。

郷友会とはいつのまにか縁が薄れたのですが、昨年、丹波新聞で関西丹波市郷友会に名称が変わって活動が続いていることを知り、早速、再入会しました。

昭和19年、京都で生まれ、戦時中なので父親の郷里（兵庫県水上郡春日町棚原）へ疎開し、終戦後、母親の郷里（兵庫県多紀郡丹南町大山上）に移り、以後、小学校が大阪の吹田、中学校が北九州の小倉、高校、大学が東京、社会人になってからは大阪と、ずっと都会暮らしをしてきました。

生まれも育ちも暮らしも丹波ではない

中学生からは丹波から遠ざかってしまいました。が、社会人になってから郷友会を通して丹波との繋がりが再開しました。

昭和42年（22歳の時）に、当時の関西水上郷友会に入会し、会員の中では最若手でした。

父（上田宏）が確か副会長をしており、「社会人になったんだから、郷友会に

入ったらどうか？」と誘われ、大叔父（上田要）が第3代会長だったこともあって入会しました。

昭和52年から55年まで東京勤務になりその間は抜けましたが、昭和56年に関西に戻り、また、参加するようになりました。

昔から、先祖代々が春日町棚原に住んでおり、曾祖父が明治27年（今から120年前）に建てた家がそのまま残っており、父親から引継いで現在に至っています。

引継いだ家は、舞鶴若狭自動車道の春日ICから約2kmのところであり、棚原には上田姓が何軒もあるので、私の家は通称、本上田と呼ばれています。

家には、昭和43年、祖父（上田確郎）が亡くなるまで、祖父母が住んでいましたが、その後は誰も定住せずに40数年、空き家管理で維持・管理してきました。



「本上田」と呼ばれる上田正三さん生家（春日町棚原）

築後120年経って40数年間、空き家管理をしてきたので、雨が降れば座敷や中の間、玄関土間、台所土間などで音を立てて雨漏りがしており、数年前に建築

の専門家に相談したら「これ以上、修復を先延ばしすると手の施しようがなくなりませよ」と最終宣告を受けました。

ある意味、地元のシンボリックな家なので、前々から何とかして修復し、地域活性化、賑わいの場所として活用していきたいと考えていましたので、平成27年に思い切って大修復をしました。

ただ、修復しても、私も含め血筋の者は誰も定住しません。そこで故郷に貢献できるような場所にしたの思い

から、「住み開き」という考え方で、家の一部を他人や地元に開放することにしました。

平成27年5月から移住者の染織作家、原田雅代さんに、家の一部を自宅兼工房（染織工房こおり舎）として提供し、家の管理もお願いしています。

原田さんは県内唯一の養蚕農家に弟子入りして、蚕の育て方を学び、工房で蚕を飼って繭にして、繭から糸を引いて染め、機織りをして絹製品にするまでを、一人で一貫手仕事で頑張っておられます。

移住者には地域の事情が分かりにくいので、地域と縁のある者が移住のサポートをする必要があると考え、自治会長さんと連絡を取って、隣保・自治会入りの準備をするなど移住しやすい環境をコーディネートしました。

これからも、原田さんのように丹波で



本上田邸で行なわれた第2回目の「丹波の手仕事展」
(2016年11月 丹波新聞提供)

がんばっていきたくてと思われる移住者をサポートしていきたくて思っています。
平成27年11月に、地域活性化・賑わいの皮切りとして、第1回「丹波の手仕事展×本上田邸」が開催されました。

手仕事を生業とする丹波市在住の作家の作品を集めた展示会で、手仕事の集大成である築百二十年の屋敷と現代の手仕事作家とのコラボを来場者に楽しんでいただきました。

17日間で1200名の来場者があり、本来は住居である本上田の家がイベントをすることで、丹波の魅力の発信拠点になれることを実感した次第です。

翌年も開催し盛況で好評だったので、毎年11月に継続開催を予定しています。

このイベントは、丹波ものころネットワーク（代表・乾善弘氏）の主催で、夏には、子供たちを対象に、夏休みに手仕事の楽しさを伝える「ものころサマークラフト」（ワークショップ）も開催しています。

平成28年6月からは染織工房こおり舎で、丹波市立春日中学校の「トライやる・ウィーク」（地域に学ぶ中学生体験活動

週間）も受け入れていました。

原田さんも移住してから早や2年が経ち、今年5月の連休には、工房展「丹波のきぬ展」を開催し、棚原へ農業以外で移住してきた人の初めての試みを地元の人達にも喜んでもらえました。

本上田の家は使い方次第でまったく違う顔を見せてくれます。ある時は工房、ギャラリー、ある時は、ライブ会場、能の舞台など、本上田の家がたくさんの人の夢や想いが形になる場所になればと思っています。

皆様から色々な使い方、アイデアをお聞かせいただければ幸いです。

皆様と一緒に新しい丹波（孫ターン）物語を紡いで行けたらと思っていますので、どうぞよろしく願っています。

（28年度総会でのスピーチをもとに。神戸市在住）

アンテナ増設、ほぼ全域カバーへ

みんなのFM805たんば

たんばコミュニティネットワーク理事長 足立 宣孝

FM805たんばは、NPO法人たんばコミュニティネットワークが兵庫県丹波市氷上町市辺に開局したFM放送局です。具体的な構想から2年半をかけて平成27年9月17日に電波を流し始めました。

丹波市は10年以上前に6町が合併して丹波市になりましたが、案外隣り町の事をよく知らないと感じていて、もっと地域の事を知りたい、皆にも知ってもらいたい、そんな思いから、コミュニティFMを通じた情報発信をテーマに、ラジオに興味のある仲間が集まって研究会を続けていました。

そんな中で平成27年8月16日夜半に、

丹波市豪雨災害が発生しました。研究会のメンバーはFM放送を通じて何かできないかという思いで、「丹波市災害エフエム」(臨時災害放送局、期間限定3ヵ月間)を9月17日に開局しました。場所は豪雨災害のあった市島町前山地区コミュニティセンターのホールの一角でした。当初は、朝1時間、夜1時間でスタートし、順次朝、夜の時間帯を増やし、昼の時間帯も放送を始めました。生放送の時間帯以外は音楽等を流しました。

放送内容としては、被災地域の復旧・復興に向けた「元氣の出る放送」を目指

しました。

具体的には①被災地、被災者の心のケアにつながるトーク ②地元からの情報(自治会長等の話等) ③社会福祉協議会からのボランティア情報 ④現地住民の「頑張ろうメッセージ」等でした。新たな大雨が予想される日には、NPO職員が放送局に24時間待機して緊急時に対応できるようにしました。そして11月末に一つの区切りとして放送を終了しました。災害時に対応する臨時免許だったからです。

研究会のメンバーはこの経験で自信をつけて、その後、本格的な放送局の開始に向けて走りだしました。1年後の9月17日に今の放送局が放送を開始しました。放送免許上の名前は、「たんばコミュニティエフエム」(80・5MHz)です。愛称は一般公募して、「805たんば」に決まりました。

放送は市内2か所にアンテナを立てて



F M805のパーソナリティたち（氷上町市辺のスタジオで 丹波新聞提供）

行ないます。氷上町の安全山と市島町の高谷山の2本です。丹波市は、地形的には大きく3つの谷に分かれているため、電波が届かない難視聴地域が多く存在します。特に聞こえにくいのは、山南町方面です。

そこで、サイマル放送（アナログとい

ンターネットの同時並行放送）で難視聴解消を図りました。丹波市は氷上郡内の旧6町が合併した市でもあり、知っているようでお互い隣の事は知らない状況にありました。FM放送を通じてわがまちの地域情報が共有され、住みよい丹波に貢献するためには、この難視聴解消は必要不可欠だと考えました。また丹波市出身の都会で住んでいる皆様には、ふるさと丹波の情報がリアルタイムで、パソコン・スマホ等で聴くことが出来ます。あの懐かしい丹波弁が放送の中でぼろぼろ出てきます。

市外に向けては、丹波の魅力発信も可能になりました。丹波市にはあの懐かしい田舎の風景がまだ数多く残っています。四季を通じ

て観光、食べ物等の情報があり、多くの人に丹波の魅力を伝えたいと思っています。

FM805たんばはFM放送を通じてたんばの魅力を発信し、地域づくりや地域の活性化に貢献する事を目標としています。そのため、出来るだけ多くの方々にもFMに出演頂きたいと考えています。今年も一人でも多くの皆様にスタジオに来ていただき、マイクの前でお話をして頂きたいと思っています。

FM局の運営については、特定非営利活動法人（NPO法人）が運営しており、FM応援団、CM収入が主な運営経費です。特に、外部から補助金等の運営支援を受けている訳ではありません。市民の皆様を支えられて続けております。本当にありがとうございます。

現在のエリアカバー率は、市内で60%程度です。FM放送をもっと多くの人に知って頂き、活用して頂きたいというこ

とで、局3本目の中継アンテナを山南町内の至山に10月頃、建設を予定しています。完成しますと、市内の90〜95%のエリアをカバーすることになります。放送免許は国が管理する許可事業ですので不確定な部分が沢山ありますが、これを目標にして進んでいきたいと思っております。

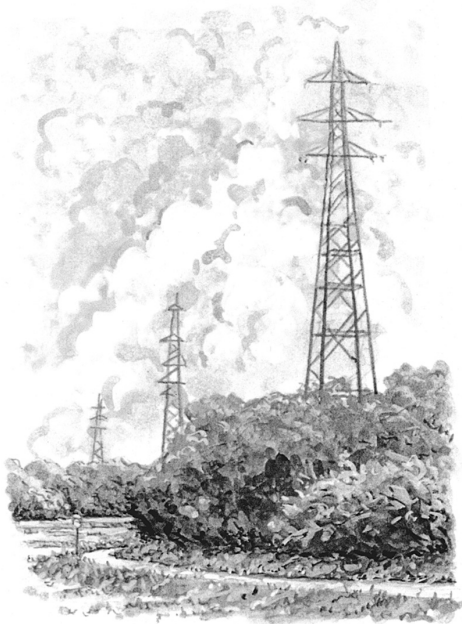
施工経費の都合上、施工方法は人力が中心です。山の上の工事の方法は道がない場合、仮設トラックを敷設します。その上で機材を運んで施工します。経費はアンテナをもう一本立てたくらいかかります。至山は自動車道路がありません。そのため、頂上まで残り100m程度は、機材を皆で持ち上げるイベントを計画しています。人力、資金等で皆さんにご協力いただいてFM局を充実していきたいと思っております。

一人でも多くの方が関わって頂いていくFM局を目指して頑張っていきたいと

思っています。

FM応援団、CM収入等で御協力ご支援の程、よろしくお願い致します。

(28年度総会でのスピーチをもとに)



私と関西丹波市郷友会

常任理事 池畑廣士郎

入会時の記憶は曖昧だが、平成5年11月20日に宝塚ホテルで行われた総会写真に写っているところを見れば、たぶんその年に入会させていただいている。50歳の本来なら分別も持ち合わせ、渋みも出てくるのだが、振り返ってみるとまるで逆で、生臭く己だけが生きている如く勘違いし、しかしそこそこの経験も重なってきているので、人の付き合いも上っ面をはね、その場を上手に収める技術にだけ、怖いもの知らずの世にいう鼻持ちならない典型的な男、の写真があった。

丹波柏原生生まれの鼻持ちならない男はその時130年の歴史のある老舗がありながら、中央に会社を持ち、さらに日本

有数の流通グループの御大と、どういうわけかかなり深い付き合いで、さらにどういうわけか流通グループの経営に参加するように誘われていた。2年後の52歳には参加してしまうのである。

落下傘で入った男の評価は、総グループ15万人がすべて敵であった。普通、52歳にもなれば故郷へ帰る準備をしていくが、52歳になって初めて丹波から外に居をかまえた。丹波にある会社を女房に押しつけて。心ある人たちは当然猛反対であったが、流通では日本一と言われている親分から直々のさそいに舞い上がり、冷静な判断ができなくなっていた。何年かの後、その御大将が突然姿を消してしまった。グループを存続さすため

の金融機関との取引であった。当然ながら孤立無援の残された男は、真っ黒こげになり屑のようにグループから放り出された。今までの虚構の勲章が完全に打ち崩されたのである。傲慢なうえに更に傲慢が重なったこの男を叩きのめすには、神様はこの方法しかないと判断されたのだろう。

癌に重粒子治療というのがあるが、甲子園球場のような大きな広場に立たせて、そのがん細胞に向けて重粒子がすごい勢いで飛び込み、がん細胞を撲滅させるのである。この癌以上に蝕まれた男を治療するには彼の理想とする流通の世界、しかも日本トップの世界に引きずり込んで一気に叩き潰す以外に方法が無いと判断したのであろう。

さすがに完膚なきまでたたきのめされると、自分の立ち位置がどこなのか素直に受け入れることができた。まだ生臭さは十分に持ち合わせているので仏のよう

に悟りはないが、それは死ぬときに間に合えばいいと思っている。傲慢面を装って生きてきたその間にメリットも生まれている。

流通のトップの御大と共に経営してきたこともあり、それまでの人脈以上に幅広い人脈もできた。今、日本を動かしている若手経営者（といってもいい年になってはいるが）たちともホットラインが存在している。

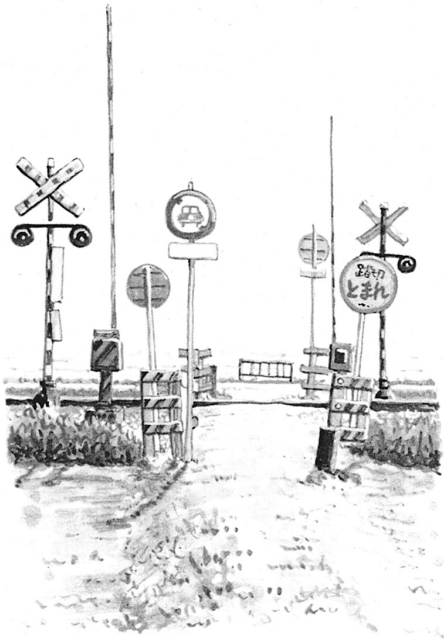
彼らも今あるのに順調な道はなく、大きくなればなるほどその厳しい、いばらの道を通ってきている。

関西丹波市郷友会の歴史を拝読して、初代から基礎を作られた大先輩諸氏のご活躍は、それこそ血のにじむような御苦労の上になし遂げられた人生の集大成であろう。物流も交通手段も何もない時代に初代会長はじめ歴代の会長、役員、会員の方々のご活躍は丹波人として大変な名誉であり、丹波から輩出した大先輩の

遺徳をしのべる会に席を置かせていただいていることに無上の喜びを感じるのである。大先輩が抱かれた丹波に対する思い、故郷が平和で豊かであってほしい熱い思いがこの会を作らせたことに間違いない。

その精神を引き継ぎ、新たな郷友会を船出さそうとしている。偉業を成し遂げられた大先輩の豊かな精神を糧にでき、こんな贅沢な会は唯一、関西丹波市郷友会だけであろう。

（柏原町在住）



丹波市を変えましょう

「花ひろく事業推進」

丹波市長 谷口進一

平成16年12月、丹波市発足以来3期12年、新市のレールを敷かれた辻重五郎氏の後を引き継ぎ、2代目の丹波市長に就任させていただきました。選挙期間中を通し常に市民の方々と異口同音に言葉が続けた言葉「画期的に変えてくれ！」。県下で唯一の「6町対等合併」という困難を乗り越え、血のにじむ努力をされた

前市長には心から敬意を表します。一方で今後さらに加速する人口減少への対策に思いを巡らせると、これからの自治体の首長をお引き受けする意味、期待の大きさ、責任の重さに文字通り身の引き締まる思いです。

就任前日の12月4日、辻市長から引継ぎと心構えをお聞きしました。大きくは次の2点だったと思います。

1点目は「丹波市総合計画」はじめ諸計画はできた。あなた（谷口）にはそれを具体化、いわゆる「見える化」してほしい。

2点目は「丹（まごころ）の合併」を目指して12年間努力してきたが、道半ばだ。それを実現してほしい。

2019年に照準

平成29年度当初予算編成まで時間的猶予はありませんでしたが、引継ぎの2点

を念頭に置き、加えて「スピード感」「実行力」を信条に私なりに突っ走りしました。

特に打ち出したかったのは、委ねられた4年間に可能な限り「丹波市の体質改善」を図ることでした。そのために思いついたのは「締め切りの効果」。照準を合わせたのは2019年（平成31年）です。

丹波市発足15年、豪雨災害から5年の節目。この年には待望久しい統合新病院がオープンします。「第2期丹波市総合計画」（平成27～36年）の前期5年が終了する年でもあります。これは東京オリピック・パラリンピック（2020年）の前年。多分、日本中が世紀の大イベントを目前に控え、沸き返っている時です。

2年間の準備期間を経て2019年（平成31年）丹波市を挙げて市民総参加で「ワクワクドキドキ・キャンペーン（仮

恐竜化石で広域連携した4自治体の首
長ら(2017年5月、ちーたんの館
で 丹波新聞提供)



称)を展開しようとするものですが、
重要なポイントは「単なる観光キャン
ペーンにしない」ということです。すで
に計画、予定はされていたが整備スケ
ジュール、オープン・完成時期が明確で
なかったものに「この時期までに完成さ
せる」とケリをつけること。

即ち2019年を「丹波市元年」と位
置づけて多くの事業・プロジェクトが一
斉に「花ひらく」、そんな「アツと驚く
舞台転換」をお膳立てしたいのです。

少し具体的に説明します。「統合新病
院」は平成31年度中にオープンが予定さ
れています。「柏原支所の観光拠点化」
は数年前から議論されてはいましたが踏
ん切りがついていませんでした。その他
に「市民活動プラザ」「男女協働参画セ
ンター」「農の学校」「青垣廃校舎跡地活
用」「丹波竜フィールドミュージアム構
想の具現化」など、実に多くの素材が横
たわっています。これらが全て2年後に
耳をそろえて「花ひらく」ように手綱を
とりながら、2019年に「ワクワクド
キドキキャンペーン」で盛り上げます。
これを「丹波市シティプロモーション」
と称し、当面3年間のタスクフォー
スで市役所内に担当理事、推進室を置き
ます。

「市の歌」でムード作り

おっと、2点ばかり言い忘れていまし
た。一つは2019年の成人式でお披露
目したいと願っている「丹波市の歌」の
制作です。丹の合併のためには右脳に働
きかけることは必須です。若者・女性が



県立新病院の完成模型(丹波新聞提供)

未来に夢と確かな希望をもち、地域を支えながらしなやかに生きていこうとする姿、それを応援する市民の力が密かに漲ってくる、そんなムードづくりに一役買いたいと願っています。

二つには、恐竜化石を活用した自治体ネットワークの構築です。福井県勝山市は誰もが認める「恐竜王国」。これに對抗して「恐竜によるまちづくり」を目指す「北海道むかわ町」「熊本県御船町」と広域連合を組み、丹波市・篠山市を加え4市町で互いに地方創生の知恵を出し合おうとするものです。

健全な出世欲持て

ところで、職員に常に言い続けていることがあります。一つには「健全な出世欲を持て!」。出世(昇格)するということは単に名誉なことではない。それ以上の上の責任を背負い込むことを覚悟する、という意味に理解しています。その気概

がないのなら「他の仕事を探すべし!」

二つには「良い意味での公私混同のススメ」これは父親からの遺言でもありません。

楽しくなければ良い仕事はできない。

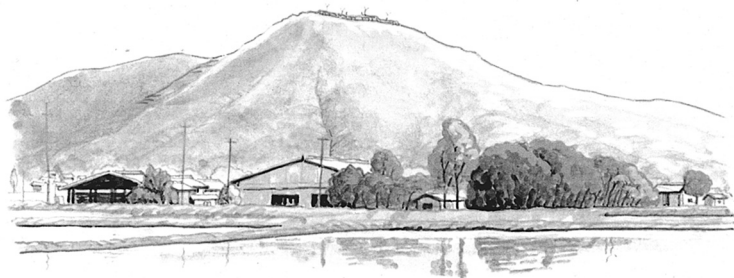
たとえどんな部署に配置されても、自分なりの目標を定め、それをクリアするために寝食忘れて没頭できる毎日、それこそが充実した人生であり、市民が求める公務員像であると確信します。

さて、平成29年度当初予算は「夢たんば発進! 予算」と名づけました。

「丹波市元年」と名付けた2019年に向けて、4月からロケットスタートを切りたい。

「オッ、丹波市が変わったな!」「何か賑やかになりそうやで!」そんな4年間にしたいと密かに念じています。

(2017年2月記)



日本の良き文化伝えたい

海外の暮らしに学びつつ

アートコーディネーター 中川 真 貴



パリのリュクサンブール宮殿で

3人兄妹の末っ子で幼少からおてんば娘だった私は、その頃築250年ほどの、大きな母屋の屋根に上っていました。「危ないから降りて来なさい」と下

から見上げる両親や他の大人達の声も聞かず、屋根の上で寝転がったり、走り回るのが日常でした。遠くの山々の頂上に少し近づいたような、あるいは澄み渡る

青空のさらに遥か彼方の見

知らぬ所に行けるような気分だったのでしょうか。学校が終わると、勉強はそっちのけで、近所の男の子達と田んぼやお寺の境内を駆け回り、屋根に登る毎日でした。

そんな私にも秘密の場所がありました。少し薄暗

く、乾いた古書の匂いのする父の書斎でした。ここには医者である父が集めた医学書の他にも、いろいろなジャンルの本が並んでいました。その中にあった「世界の美術館全集」を眺めるのが私のお気に入りでした。小さな子供には大きく重い本だったので、ページをめくりながら、このような作品が描かれる国々ってどんなところなのだろうと思いを膨らませていたのです。こうして私のヨーロッパ文化に対する憧れが育まれていったのだと思います。

私の父方の曾祖父である中川幸太郎（1860―1940）は、大正14年、犬養毅内閣の時、衆議院に当選し、丹波の発展の為に働いていたという資料が残っています。祖父の中川幸之助も政治家でした。二代にわたる政治活動のせいで財産を使い果たしてしまったためか、父の代からは医者業を始めました。

物静かな中川家とは対照的に、黒井町

の母方の祖父は大変社交的でした。明治時代にアメリカのスタンフォード大学に留学し、祖父母共にアメリカに長く住んでいました。日本女子大学の校長にもなった井上秀御夫妻とも交流があったそうです。両家の曾祖父母や祖父達とは会う機会もなかったのですが、なんらかのDNAが私の中に残っていただいいなと願っています。

山南町久下小学校卒業後、中学、高校、大学と10年間で京都御所の近くにある同志社で過ごすことになるのですが、京都も私にとっては華やかな「花の都」でした。中学に入学したばかりの頃、英語の先生から「君は丹波の山猿だね」と言われましたが、これが私の原点になるのかもしれない。一方で同志社の教えの一つである



フィレンツェのサンタ・クロッチェ教会前で

「隣人を愛せよ」は芯となっていると思います。

同志社大学卒業後、しばらくして海外生活が始まりました。アメリカでの大学生活を始めて間もない時、クラスメートに再三言われたのが、「Maki, Say yes or no. (イエスカノーをはっきり言いなさい)」ということでした。どんな些細なことでも自分の意志をはっきり言うことは、驚くほど呑気にそして曖昧に生

きてきた私にとって転機になった言葉です。人生の半分以上を欧州とアメリカ、オーストラリアで暮らしていると、欧州と新大陸とでは、まったく違う物事の考え方、思考、風習、慣習、差別感がありました。自分の意見をはっきり言うことは、どの国でも共通でした。

海外にいると、日本では当たり前で日常意識しないことを意識させられます。それは自分が「日本人」であることです。

「何県のどこの出身?」「どの学校の卒業生?」「バックグラウンドは?」ということには誰も興味を持ちません。海外では、唯一、日本人であるということを除いて、自分は個人の人間であり、それ以外の何者でもありません。近所で私の名前を知らないイタリア人達からは「シニョーラ ジャポネーゼ (日本のご婦人)」と呼ばれているようですし、どこに行っても「貴女は日本人ですか?」という質問が出ます。

そうした中で、日本人であるという誇りが持てるようになったのは最近かもしれません。文化、慣習、考え方も全く違う人々の中で生きていくわけですから、今あるがままの個人である自分を最大限にアピールしなければ、中に入っていくことはもちろん、共存することも難しいのです。外国での生活や出会いは、いつもゼロからの再出発であると思っっています。それでも一人の日本人として、良き日本人の民族性と誇り高い文化を伝えることができると望んでいます。

仕事柄、世界の芸術関係者に出会う機会が多いのですが、共通して言えることは、国境がなく、表現の壁もなく、過去の戦争からの問題を背負うこともなく、何かに縛られることなく、実に自由に活発に話せることです。他国や他者を受け入れ、自分たちの美や目的を追求していく芸術家達に国境や決められた規則はありません。彼らは澄んだ情熱的な瞳で自

分を表現しています。芸術を通しての文化交流が世界の平和に貢献できているのは、こうしたことにも理由があるのでしよう。

日本ほど便利で安全ですべてのことが機能している国は、世界中で唯一だと確信しています。しかし、一度海外に出てみると、日本がどれほど素晴らしい国で

あるか、また反対にその短所も客観的に見えてきます。これからの若者には、旅行や長短期の滞在を通して、海外から日本を見る機会を持ってほしいと切に願っています。

(山南町出身、イタリア・フィレンツェ在住)



ヒマラヤの絶景と高山病

エベレスト撮影の旅

臼井隆夫



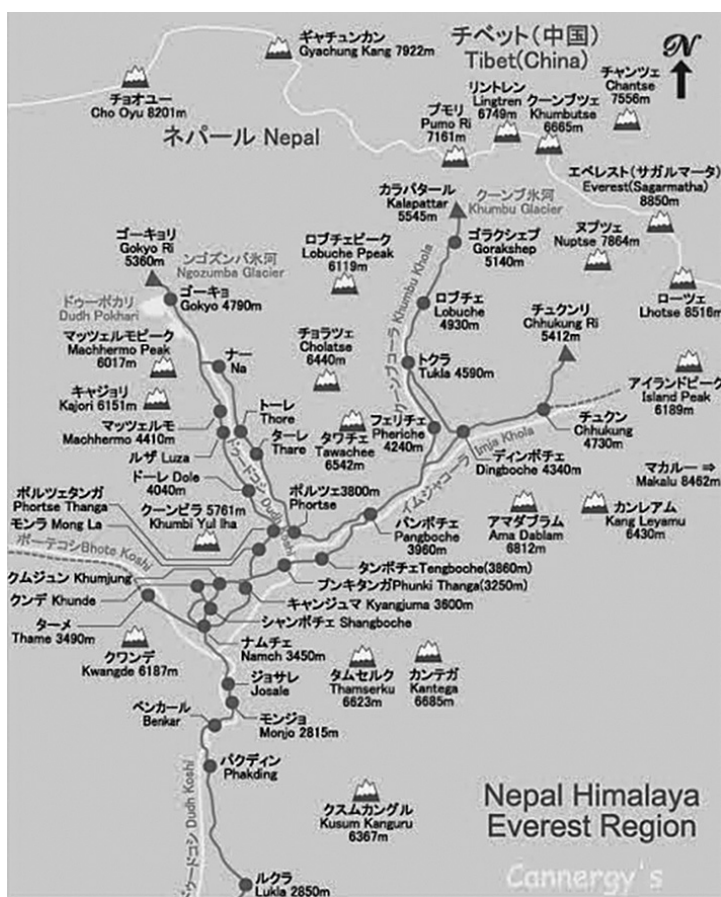
クワンデ（6187 m）の前で（左から2人目筆者）

4年前にネパールのトレッキングに行き、次はエベレストを自分の目で見て写真を撮りたいと思っていたところ、昨年5月、東海大学の同窓会で旧友の遠藤博隆君に4年ぶりに出会った。彼は55歳の時、早期定年退職し、エベレストに挑戦して登頂に成功していた。毎年海外の山に行き、来年（つまり今年）はエベレスト街道ツアーを企画しているとのこと、すぐに加えてもらうことを決めた。彼の仲間や私の友人も合わせ総勢男女10人（平均年齢68歳、最高80

歳）。30日間の行程で遠藤君ら3人は6189呎のアイランドピーク登山を目指し、私を含む他の7人は、エベレスト街道を5200呎辺りまでトレッキングする計画で、3月20日、日本を発った。

結局、団員のうち1人だけがアイランドピーク登頂に成功、私は残念ながら5000呎の所で高山病にかかり、12日目にヘリコプターで下山する羽目になったが、ほかの9人は元気でヒマラヤを満喫したようだった。私もカトマンズまで戻るとすぐに元気を回復し、数日間、市内を見物して皆より早く帰国した。

カトマンズで大きなザックとレンタルのダウンジャケット、寝袋などを旅行社から受け取り、必要な水筒やストック類の買物をして22日早朝、空港へ。20人乗り位の小さな飛行機は天候の加減で4時間遅れてルクラ飛行場に着陸。『世界で2番目に危ない』と言われているので、客席から歓声が上がった。



ルクラは快晴で、真っ白なヌーブラ山(5885m)が見える。ホテルで昼食を取り、出発の記念撮影の後、ここからは全てトレッキング。水牛とヤクを掛け合わせたゾッキョという牛に大方の荷物

を運ばせ、我々はカッパ、水筒とその日必要なものをザックに入れて歩き出す。この日は2850mからパクディン(2650m)の下りのコース。ルクラの町を抜けるとすぐに大きな谷間の細い

道を何本かの吊り橋を渡り進む。沿道では桜やモクレンが咲き始めている。

我々10人についているのはメインガイドとサブガイド、登山ガイド、料理長、手伝い3人の7人。それにゾッキョが8頭。

行程は毎日ロッジに泊まり、夕方到着し翌朝8時に出発。朝と夕食後に血液中の酸素濃度SPO₂と心拍数を測定する。夕食と朝食は料理長がロッジのキッチンで作ってくれ、朝食後、後から出発して我々を追い抜いて、昼食場所で用意して待っていてくれる。野菜が日本と同じものが取れ、少しスパイス味はあるがほとんど日本食と同じ。ただし肉は水牛なので硬い。

2日目は、ナムチェ(3450m)を目指して谷の斜面を沢と吊り橋などを渡りながら歩く。この日の高低差800mはツアー中一番で、老齢の我々は他の登山者よりゆっくり歩く。ナムチェのロッジまではかなりの急坂で、へとへとに



ゾッキョに荷物を背負わせて進む（バンボチェ4000 m付近）

はちょっとした町で、バザール（市場）が近在の村人たちを集めてにぎわっている。午後、そこを見学してロッジに戻る。

4日目。大きな木のあるアルパインゾーンを歩く。団員の1人が小さな鯉のぼりをリュックに付けているのを、帰路の日本人が見つけて話しかけてきた。最近日本人が減り、中国人と韓国人が多いらしい。欧米人達も少なくなき、「ビスタリ（ゆっくり）」と言いながら進む我々をどんどん追い抜いて行く。でも宿泊する所は同じなので、見覚えのある顔も多い。ダイボジェ（3710 m）に着く。

3日目の午前には高所にも慣れてきて、急坂を登ると周りの6000 m以上の山々が見渡せた。初めて見たエベレストを撮影しながら、エベレストビューホテルへ。同峰が眺められる最高地の快適なホテルのテラスでコーヒーを頂いてから、ナムチェの町まで引き返した。ここ

5日目、高山病の症状を訴える人が3人位いるので、予定を変更して半分くらい、小さな木のあるサーバルツゾーンのバンボチェ3960 mまで午前中だけ進んだ。6日目はディンボチェ（4340

m）まで。空気はさらに薄くなり、道はなだらかでも通常の3割ほどの速さでないと歩けない。しかし360度、6000 mを超える山々の眺望はまさに絶景だ。

これから一層高度を増すのに順応するため、ディンボチェで2泊。洗濯をした後、午前中少し高い所まで登るだけで時間を過ごす。ほとんど草木が無いナビルゾーンに入った。前を見ても振り返っても、さらに景色が一変する。8日目、ロボチェ（4930 m）へ向け北進。山の形も変わるし、氷河が流れているのも見える。トクラ（4590 m）で昼食が少し入らなくなった。エベレストで亡くなった人の墓地があり、団員の女性の主人のお墓に参った。夕方の測定でSPO2値が57と大変低くなる。少し高山病か、夕食は進まず、かなり疲労を覚える。

9日目、ゴラクシェフ（5140 m）の最後のロッジに向け、コーヒーだけの朝食で出発。草木は全くなかった。まだエ

ベレストは見えないが、プモリ(7161 m)のすそ野、カラパタール(5545 m)が見え始めた。途中5218 mを越えてロッジに割と早く着いた。ここから先にロッジは無い。食事は何も受けつけなくなり、下痢と嘔吐が激しくなる。

10日目、今回の目的地であるカラパタールに向け、エベレストからの日の出を見るため早朝暗い内に出発するが、下痢症状が激しいので登頂を諦め、遠藤君についてもらって2人だけロッジに引き返すことに。エベレストの右側から登る日の出だけは撮影できた。皆が降りてくるのを待ち、ロブチェまで下る。

11日目、さらにディンボチェまで下る。皆は翌日から東方へ再び上って行ってチュクン(4730 m)、チュクンリー(5150 m)をめざし、さらに遠藤君ら3人はアイランドピーク(6189 m)に登頂する予定だが、私にはもう限界だったので、救助ヘリコプターを呼ん

で一足先にカトマンズに帰ることに。もう3日間、固形物を食べていない。

翌日、5センチほど雪の積もった広場のヘリポートから、皆に見送られてルクラへ飛ぶ。ヒマラヤの山々を見降ろしながら、全部の行程を皆と一緒に完遂出来なかったことは心残りだったが、ともかくエベレストをカメラに収めるという目的だけは達成できたと、自分を慰めた。

カトマンズ空港に日本人通訳が迎えに来てくれていて、外国人用病院に入院。一晩静養して翌日にはすっかり元気を回復。この4日間何も食べられなかったのが嘘のように、朝食も昼食ももりもり食べられた。保険会社とも連絡が取れ、ヘリの費用も出るようだ。入院3日で退院し、ホテルに移動。ステーキとビール2本、久々の最高の昼食をすませ、一人でカトマンズ市内を見物した。



ディンボチェ(4343 m)からロブチェ(4930 m)めざして
(後尾から3人目筆者)

さらに数日、市内に滞在し、4月5日に関西空港に生還。終わり良ければすべて良しの、色々な経験をした旅行だった。
(春日町在住)

二葉ゆゆさん、颯爽と

宝塚歌劇デビュー公演を観劇

常任理事 山口直樹

「華やか」、「華麗」、「夢の世界」、「別世界」、「俗世を離れた、実に華やかな世界」、「綺麗」、「美しい」、「優雅」。色々

な言葉で形容できる宝塚歌劇団の舞台です。若い女性が憧れるのがよくわかりま



二葉ゆゆさん

す。その舞台に今、青垣町出身の二葉ゆゆ（本名・足立由結）さんが立っているのです。

彼女が出たのは、雪組公演「幕末太陽傳」の中の「Dramatic S」。これは、103期生40名全員が出る最初で最後の舞台です。103期生は、特に団結力が優れているそうです。パンフレットによると、通常の2倍(約4分半)のラインダンス。ガーシュウィン兄弟による名曲「ス・ワンダフル」にのせて、ラインダンス、ドミノ倒しのように順番に体を倒していく動きや、マスメームのようなフォーメーションダンスなど斬新

な振り付けで4分半、軽快にステップを踏むのです。40名がラインを組んで、一糸乱れることなく、華麗に笑顔を絶やさず舞い踊りました。すごい運動量ですが、息を切らすこともなく、笑顔を絶やさず踊り、40名が1個の生き物のごとく、動いていました。

「二葉ゆゆ」さんの初舞台、それもゆゆさんが103期生を代表して口上を述べる舞台を見ることが出来ました。口上を述べるのは、1回の公演で3名。ゆゆさんは、公演期間中（4月21日～5月29日の間に計54回）で4回。その内センター口上を述べるのは今回1回のみ。満席の観客席から多くの視線を浴びながら、しっかり大きな声で述べていました。

ゆゆさんの合格が決まったときの丹波新聞の記事によると、40人の定員に対して応募者は、1063名。実に26・6倍の狭き門です。その上ゆゆさんは、1回目受験で合格しています。素晴らしい



宝塚歌劇団103期生が初舞台。息の合ったラインダンスを披露

ことです。規定によると、中3から高3まで、最高4回は受験できるそうです。

ちなみに、中学生の1回目の受験で合格したのは、103期生では、40名中10名だったそうです。「幼い頃から目指してきたタカラジェンヌへの一歩。諦めず続ければ夢は叶う。丹波の星になりませ。」と語っている。強烈な目的意識を感じます。

ゆゆさんは、今後は、娘役として活躍したいそうです。所属は花組だそうです。同期生は、これからは、5つの組に分かれて、舞台上がるので、全員で出るのはこれが初めて最後ということですね。音楽学校の卒業生は、花組、雪組、など5つの組に分かれますが、それは、本人の希望ではなく、歌劇団が決めるそうです。

僕は、宝塚歌劇団の存在は当然知っていましたが、自分にとっては遠い存在でした。ところが、知人の娘さんが、あの

入学の難しい音楽学校に合格したと聞いたときから、大変身近な存在になりました。舞台に立つようになったら、必ず見に行こうと決めておりました。それが今日実現したのです。僕にとって、夢の世界が身近に感じたときでした。それにしても、本当によく練習をされていると、つくづく感心しました。

一般的には、高校生になっても将来の自分のことを思い描くことが出来ない人が多いのに、幼稚園の頃から、将来はタカラジェンヌになるのだという強烈な目的意識を持ち、それに向かって懸命の努力を続け、音楽学校に合格し、厳しい訓練に耐え卒業。この度めでたく歌劇団の一員になったのです。素晴らしいことです。これからも、素晴らしい舞台を見せしてくれるものと思います。大きく成長されることを期待しています。僕もファンクラブの一員になり、末永く応援したいと思います。

(氷上町在住)

「細見綾子賞」など多彩に

市俳句協会設立と今後の事業

丹波市俳句協会会長 足立頼昌

私たち俳句を詠む者にとっては「歳時記」はバイブルである。歳時記を開くと細見綾子先生の句が目止まる。

「ふだん着でふだんの心桃の花」「チュウリップ喜びだけを持ってゐる」「冬来れば母の手織の紺深し」「鶏頭を三尺離れもの思う」。綾子先生の俳句は生活と共にあり、質素でやさしい句が多い。

これまで丹波では「田ステ女俳句ラリー」、「丹波青春俳句祭」などを実施するグループがあり、逝去された細見綾子先生を顕彰する事業についても話題が上がっていた。そこへ一昨年、ご遺族が丹波市に多額の寄付と生家を寄贈され、丹

波市からも、綾子先生の顕彰事業を計画してほしい旨の依頼があった。今日まで実施している二つの事業に加えて新しい事業を実施するのは、これまでの陣容では困難なため、三つの事業を統括する丹波市俳句協会を設立することを決定。これまでのグループのほか、さらに新たな役員に加わってもらい、事業のありかたについて検討してきた。

その後、設立総会に向かって規約案の作成、事業計画案、事業予算案、役員の見直し等を行い、素案を作成、平成二十八年十二月三日に設立総会を開催した。会員は団体会員と個人会員で約三百名で

ある。丹波市内に制限せず神奈川県などからも加入があり、総会の出席者は百五十名であった。議案は満場一致で承認された。

平成二十八年度は、十二月・一月・二月・三月の四ヶ月間であり、設立総会終了すると同時に、平成二十九年度の総会に向かって、計画案を協議、立案しなければならぬ。多忙の日が続く。

平成二十九年度の総会は四月十五日に開催した。五月上旬に早速行なう田ステ女俳句ラリーをはじめ、真摯に取り組んでいることが認められ、議案の全てが可決承認された。

そして、五月十四日、母の日に田ステ女俳句ラリーを実施した。母の句の事前投句の表彰もあり、百二十名の参加のもとに、盛大に挙行することができた。選者は従来どおり、宇多喜代子（俳句協会顧問）、坪内捻典（船団主宰）、木割大雄（関西沖繩文化研究会理事）、山田佳乃

(円紅主宰)の各先生にお願いした。
また十一月十八日には、たんば青春俳句祭を計画している。投句はインターネットで全国募集する。部門は、小学生、中学生、高校生、大学生一般、ラリーの



俳句協会設立総会であいさつする筆者

五部門で、投句数は例年六千五百以上。青森県から鹿児島県までである。選句は出席者とトークを交えながら公開で行なわれる。その席で、大賞・優秀賞が決定する。

選者はステ女ラリーでもお願いしている坪内捻典、山田佳乃両先生に、植山俊宏先生(京都教育大教授)が加わられる。これに合わせて細見綾子賞も計画し、綾子先生の「風」の流れをくむ茨木和生(運河主宰)、板倉西嫻(漁火主宰)、辻恵美子(梅檀主宰)の各先生にお願いしている。大賞一句、選者賞三句、入選若干名である。

協会では先述した事業のほかに、丹波市内小学校、中学校、高校、支援学校に俳句の出前教室を行っている。大変人気があり、年々依頼校が増えている。

このほかにも実施したい事業は色々ある。丹波市内には著名な俳人が多く輩出している。田ステ女、西山泊雲、野村泊

月、片山桃史、西山小鼓子、細見綾子、塚口柳外、田村善斎、臼井方良などなど。この方たちを一冊にまとめた句集の作成なども行いたい。
みなさまの暖かいご支援、ご協力をお願いします。

(青垣町在住)



片山桃史の生と死 〔上〕

一色 哲 八

には同校青年団の野菜品評会において、大根の部で四等賞を受賞している。桃史は小さい頃から本の虫であったという。三人兄弟の末っ子であり成績抜群であった桃史は、両親にとって目に入れても痛くない存在であっただろう。

片山桃史。本名片山隆雄は大正元年（1

912）八月二十三日、氷上郡黒井村黒井に、酒販業を営む父作治と母かめの第四子三男として生まれた。

長男一郎の妻てる子は、田家（江戸期の俳人、田捨女の末えい）中興の祖といわれる第十一世当主季晴のすぐ上の姉であり、成績優秀であった季晴を中学に進学させるため学費を工面した四人の姉達の一人。てる子の母「たみ」は一郎、桃史の母「かめ」とは長女、次女の関係であり、一郎とてる子はいとこ同士の結婚になる。田家と片山家は深い繋がりがあつた。尚、田季晴は旧制柏原中学にお

いて桃史の二年先輩にあたる。

桃史は大正八年四月、黒井村立黒井尋常小学校に入学。一年生から三年生まで「学業優秀品行善良」の褒状を受け、四年生から六年生まで一貫して「級長」に任命された。ただ、六年生の三学期だけ「副級長」に甘んじている。

当時の級長制は四年生からであり、クラスで成績一位であった者に、学期ごとに「任命状」が下付されている。他には「精勤賞」「皆勤賞」なども受けており、二年生の時



小学校卒業前の写真。大正14/1/25撮影。12歳、まだあどけなさが残る。

《旧制柏原中学時代》

大正十四年（1925）四月、旧制柏原中学校（現県立柏原高校）に入学。一年A組。一年生百名が三組に分かれ、共に俳句を競い合うことになる田村正男は

B組、C組には小島武男がいた。

田村正男(春日大路村)はその句集『句集三穂』(昭和58/5 私家版)に「当時学友で俳句を作った者は十名内外居た。特に熱心でその後も作りつづけたのは小島武男と片山桃史の両君である。」と書いている。

小島武男は宇多喜代子編『片山桃史集』の付録「栞」によると、「3人の中の学生が……俳句を作る事をお互いに知り合って集まるようになりました。その媒介は校友会雑誌の文芸欄であったと思います。」「学校の敷地の片隅に……銃器蔵があり、その建物の裏側の籬と壁との間の狭い所へ毎週一回集まって句を見せあったことを幽かに覚えていきます……わたしたちの学校のある柏原町から出ていた西山泊雲主宰の俳誌『鬼灯』へ三人揃って投稿することが始まりました」と書いている。

桃史は中学一年の終わり近く、生まれ

て初めて自分の文章が活字となる機会を得た。同中学友会発行の『學友會誌』第三十四号(大15/2/20)であった。同誌の文芸欄「詞藻」には三人の小文が載っている。以下に桃史の文を引用する。

「我が家」 1A 片山 隆雄

「夕陽のキラキラ光る二階八畳に寝ころんだ。雑誌の古いのが山の様につまれている。裏の畑に見ゆる柿の実は大分大きくなった。……

早や電燈がついた。お座敷の十二畳の間にはお母さんが縫物をしてゐられる。父は相変わらず店で客を相手に煙草をふかしながら話をしてゐる。兄はまだ酒の註文の配達から帰らぬ。次の兄さんは風呂でのんきさうに口笛を吹いてゐる。…… 祖母は隠居部屋で鉢植えの手入れしてゐる。……眼鏡を鼻先にかけて…… 姉は井戸端で水を汲んでゐるらしい井戸車がカラカラカラとひびいた。妹はまだ

遊びに出で帰らぬ。……」

柿の実が大きくなった、とあるから入学してさほど日の経たない夏の頃の作品であろう。田村正男の「山」、小島武男の「或る日」に比べて内容的にたわいなものであるが、歯切れの良いリズム感ある文章といえよう。

同誌次号の三十五号(大15/12/10)文芸欄は「千光萬彩」と改称。片山隆雄はエッセイ「初夏のおとずれ」「若葉」「晩秋の夜」の三篇と、他の二人に先駆けて俳句・短歌を発表する。

俳句 2C 片山 隆雄

葉櫻や雨の夜明は濁り水
葉櫻やあしたあしたの露寒し

他に(黒井川二於テ) 4句

ようやく緒についた桃史の俳句であり、最初期の作品として記録にとどめ置

きたいと思う。

雑（4首）

雨あがり山の麓の一つ家に

昼餉の煙寂しく昇る

他三首

和歌

もくもくと人動きるる麦畑は

今真昼なり風も絶えつゝ

山に来て陽を浴びながら母上と

語りつ取りつ山櫻花

他三首

三年生になると三人の創作意欲は高まり、学友会誌の文芸欄に目立ち過ぎる存在になった。桃史は三C、田村と小島が三Bと同じクラスになり、互いに切磋琢磨する二人を強く意識したのである。

『學友會誌』第三十六号（昭2/12/10）で小島は「宗教？」というタイトルで宗教への懐疑を示し、田村は「猫ことゞ

も」という長文エッセイで十頁を占拠した。

桃史は「黄昏」という四季折々の連作的エッセイ。「ふる里」という五行短詩。

「詩 夏二篇」、はては「民謡 冬の夜」という幅広いバリエーションを示す。

この号で最も注視すべきは、「こぼれ墨會句集」として会員四名の俳句が大量に載せられていることである。

小島窓雨十九句、足立杜畝留十八句、

片山たか緒十七句、田村正楓十九句。

「こぼれ墨」は手作りの持ち回り回覧誌である。

足立杜畝留こと足立徹は芦田村出身。三高から京都帝大の法科に進み三菱商事に就職した逸材であった。ちなみに小島武男は四年で中途終了して松江高校を経て東京帝大工学部を卒業、名古屋高工教授となった英才である。田村正男は模範生として学業も優秀であったが進学せず、朝鮮に渡り平壤の覆審法院（現在の

高裁）に法務官として就職し、俳句を一旦捨てたという。以後一貫して裁判所畑を歩く。

桃史は四年生で学友会委員となり、学友会誌の編集とともに創作活動に力を注いだ。四年生、五年生時には学友会委員として表彰も受けている。桃史在学中の最後である『學友會誌』第三十八号（昭4/12/10）に「或る阿蒙の感想」を記した。

一番幸福なのは何であるか

或る人は金持ちを指し、他は大宗教家を云ひ、學者、共産主義者、俳優、小説家等々を云ふかもしれない。だが結局は、幸福を感じ得る者こそ幸福なのである。

—略—

和歌や俳句は一種の遊戯現象だ。最も元始的な、自然的な約束だ。此の約束に、

私等は面白さを感じてゐる。「三十一字、十七字が不自由だ。その不自由の心を盛るのは虚偽である」

こんな人は、三十一文字、十七文字をすて、ドンドン進んで呉れたら結構。虚偽の生ぜんとする刹那に其れと闘う力から放射する光こそ、私らの求めんとするものであり、面白味なんだ。

力は障碍にぶつかって生ずる。

自分で作ってをり乍ら、勉強のプログラムを見るのが恐ろしい。

自分をだましつゝ、だましつゝ、馬車の様な生活をつゞけてゐる私の心。

自然にお尻を向けて、感嘆詞を吐く事の出来ぬ程苦しい事はない。受験生活には正にこの苦みがある。

略——
最後に、時代と場所に制限されぬ美が

あるであろうか、美に對して懷疑主義者たることは能はざる私は、一生これを研究しやうと思ふ。

小島武男は「桃史」の号を用い出したのは大阪に移ってから以降のことと推定する。だが、中学在学時から「桃史」の号は『鬼灯』に用いられていた。『鬼灯』は西山泊雲主宰と言われているが、形式上はそうでない。編集・発行人は柏原の友常愛司(号・藍兒)である。創刊は大正十一年六月。一貫して泊雲抜きには存在し得ない俳句誌であった。

同誌第69号(昭4/5/22)雑詠欄(西山泊雲選)の三十五人目にただ一句。

花疲れエレベーターの中にあり

丹波 片山桃史

これが「桃史」の号を確認できる最初であり、五年生になったばかりのもので

ある。続く70号に二句、71号に一句、桃史の句が抜かれている。四号分欠号にして第76号(昭5/1/1新年号)には既に最年少の同人となった田村三穂が同人詠欄に四句載せ、桃史は泊雲選の雑詠欄の冒頭に五句を飾って存在感を示した。

客泊めし布團干すなり菊日和
万葉の小邑小邑や柿の秋

歸省

大江山見えて汗拭く桑の中
牛のせて渡る船あり水の秋
飼屋の灯大江麓の一とこ

投句者は「丹後 片山桃史」となっているが、「歸省」と丹後大江山とのつながりは判明しない。丹後には縁者はいないという。

桃史は必死に受験勉強に励んだが、念願の京都三高への進学は出来なかった。

泣いてすがったというが、家業の酒店の現状がそれを許さなかつたのである。両親も辛いことであつただろう。

《鴻池銀行就職より戦場へ》

片山隆雄

書記 ヲ命ジ月俸金參拾八
円ヲ支給ス

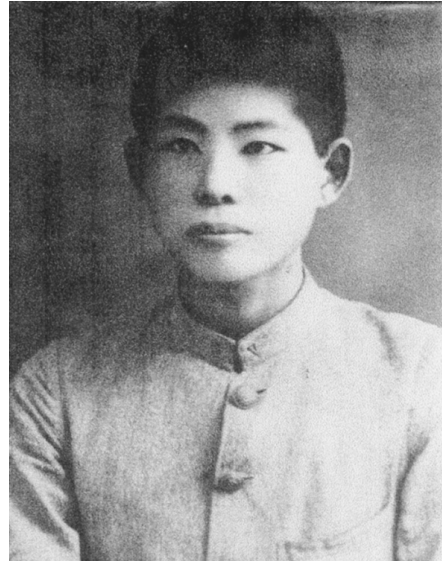
天満橋支店勤務ヲ命ズ

昭和五年三月十七日 株式会社 鴻池

銀行

「書記」とは銀行業務を携わる行員を指し、庶務などの付随的職員は含まない。銀行員とは幹部職員と書記のみを指す職業名であつた。

それにしても最初は見習いとは言え給料が三十八円とは安すぎる。東京の公立小学校の初任給が五十円前後の時代であつた。



撮影年月不詳。ボタンと襟章の「V」から中学五年生の時のものらしい

時代は昭和恐慌の入口にあつたことも原因かもしれない、金融恐慌により財閥系銀行との較差が開いたため、昭和八年十二月に山口銀行と二十四銀行が合併し三和銀行となる。桃史の二年先輩になる田季晴は山口銀行に籍を置いていた。

桃史は同時に住友銀行の就職試験も受けていた。その時の面接官の一人に誓子がいいたことなど、就職試験のアドバイスの文章を卒業半年後の『學友會誌』第三十九号（昭5／9／1）に寄せているが

実に興味深いものがある。

「畏友のM―は僕以上の俳句狂であり、實力もあつた」と田村正男を書き、「Mは官界にあせり、……AやKは學會に知識を追う河童」と切り捨てる。「MにしるTにしる、彼等の様な眼識の低い連中は、初志の藝術探究を断念し、その神聖を俗人のライフにまで引き下げて、……俺は不幸にして眼識一世に高く、天下に頼る可き何物の價値をも認める為、斯くの御徳孤立を黙守してゐる……」

Aは足立徹、Kは小島武男である。Tは誰か分らない。Tも「こぼれ墨」会の仲間であつたのだろう。田村や小島がこの文章をどう受け取つたかは別にして、桃史の芸術探究への一途さと氣迫を見ておきたい。桃史という柔らかな号は、実はその裏側に「闘志」を強く秘めたものであつた。

昭和七年十二月一日、二十歳になつた桃史は徴兵検査で「乙種」の判定を受け、

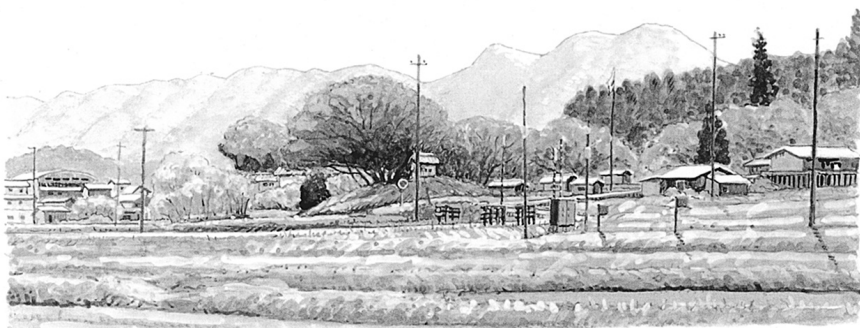


第一補充兵とされて兵営入りを免れた。桃史のその健康な肉体は「甲種合格」相当にも拘らずである。

昭和七年当時は日中戦争の始まるまだ五年前のことであり、兵員不足という状況にはななかったのであり、銀行員のような軟弱と受け取られかねないホワイトカラー族が後回しにされた例は多い。ともかくにも幸運なことではあった。

(岡山県赤磐市在住)

続きは第3号に掲載します



短歌を作り続けて……

母との時間

短歌を作り始めて半世紀になってしまいました。ある歌人が短歌を作ることは「時間に錘おもりをつける」ことだと言っています。日々の生活の中では、思いや感じることがそのまま忘れ去られてしまうのがほとんどです。しかしそれらを短歌という形式の言葉に織り込む作業の中で、ほかの時間とは異なる濃縮した時間となります。

平成二十七年十一月十四日未明に母は九十六歳の人生を終えました。

母との時間の記録を拾ってみます。

竹村 公作

泣いているような声してわが母は

屈まり足に灸すえている

左折禁止右折禁止の道走る

横には妻が後ろに母が

帰りたるわれに娘ら走り寄り

妻と母とは距離おきて立つ

ストーブを消してきたかとわれは問う

妻と母とのどちらにとなく

妻にかくれ孫に菓子やる母のそば

知らぬふりして新聞を読む

玄関を改造せよと言う母に

客など来ぬと答えていたり

わが庭に迷い込みたる蛍あり

母が一人で眠る縁先

階段は一段一段降りるもの

論ずごとくに母降りてくる

問いかくる人に道順教えおり

尊師が道を指差すごとく

うまそうに母はコーヒー啜りおり

砂糖とミルクたっぷり入れて

インターホン押せば奥より帰りくる

老いたる母の艶やかな声

背もたれに按摩器付いた古い椅子

姉が母へと贈りたるもの

若き日の母を知るのは姉とわれ

母のことにて仲たがいする

母とわれ二人のみ知る悲歌として

母は時折父を語り

畦道に一人佇みいる老婆

近寄りて知る母であること

母が前妻が横にて飯を食う

うるさき蠅は箸で追いつつ

介護とう言葉嫌いて集いたる

たましい今宵裏山登る

母ひとりテレビの前に正座して

笑える声の今宵さびしく

今宵またテレビをつけて眠る母

窓のガラスが虹の色なす

お先にと入ってなかなか出てこない

母を窺う風呂の外にて

中外製薬に甥の就職決まりたり

母の薬は中外製薬

年取った年を取ったとつぶやきつつ

母の消えたるコスモス畑

絹ごしの豆腐崩れる呆けても

箸もつすべを忘れぬ母よ

風呂の湯が張れたと知らず給湯器

妻でも母でもない声安し

咳ひとつすれば風邪かと問いかくる

母を疎しと思うことあり

杉垣のひとつところの獣道

犬行き猫行き母が行きおり

姨捨の山へ連れだち登るごと

母の手をひきエスカレーター

老犬にいたわる言葉をかけながら

母には同じ言葉かけえず

蚊を叩く技も冴えたり八十を

過ぎたる母に纏まとわるべからず

透明の袋破れずアップルパイ

喰うをあきらめ母去って行く

カート押しバナナあんパンヨーグルト

かごに放り込む母八十五

雪が降り白く覆いてしまいたる

昨日の記憶を母辿りおり

出てこない庭木の名前喉の奥

引っ張り出せばカイズカイブキ

人感のセンサーライトが灯りたり

われの帰りを待ちかねたごと

生きる知恵世渡りの知恵身に着けた

冷蔵庫あり夜中に呻く

見覚えの後ろ姿についてきて

角を曲がればそのままとなる

そこそこと言いつつ身体ずらしいる

按摩器に母八十八歳

遅咲きの桜を見せに連れ出した

母としばらく陽だまりの中

老人車押しゆく母はするずると

長い廊下を引きずってゆく

わが汚物素手で掴んでいただろう

母の汚物に手袋はめる

「もう何も怖いものなどありゃせん」

という顔をしていびきをかいて

戦争に翻弄されて生きた母

姉と吾とは父が異なる

われの事わかっているのかいないのか

母と話せり小半時ほど

ああ母は皆既月食ながめおり

九十六年生きぬいて今

手を握りあらためて知る母の手が

死ねばこんなに冷たくなると

霜月未明われ来る前に一人にて

この世去ったと思えば悔し

着ぬままの大島紬を着せてやる

亡父ちちの待ちいるバージンロード

(春日町在住)

書とデザインのはざままで

我が道をふり返れば

荻野丹雪

〈莫山と私〉

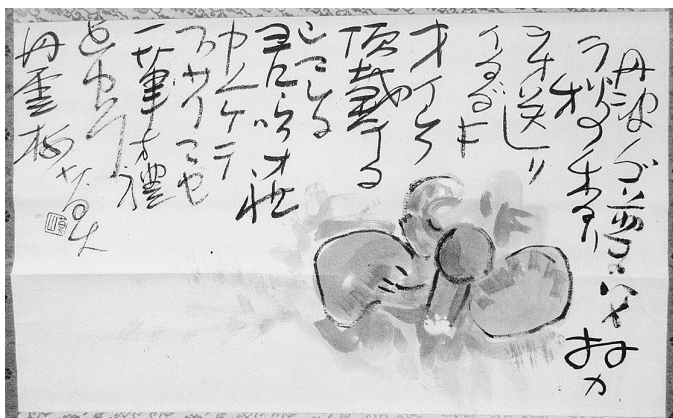
榊莫山先生（以下敬称略）と私が初めて出会ったのは、昭和四十七年、阪急の古書店。当時から業界では、かなり知られた先生ではあったが、一般によく知られるようになったのは焼酎「よかいち」のテレビコマーシャル。

私がグラフィックデザインの道に入ってから、十年近く、ようやくそれなりの仕事が出来だした頃。私は当時から仕事の上でも、よく文字を書くことがあったが、私の筆文字の名刺を差し出す「これ、私書きましてん」と。まさに恐い者知らず。先生は何も言わず、どう受け止めら

れたかは――？。

ふと、こんなきっかけで、私は当時大阪上町の先生のアトリエに週一回通うこととなった。私が書の道に踏み込んだ第一歩。

莫山といえば伝統的な書と前衛の谷間での仕事人。あらゆる書の団体から身をひいて一匹狼になった人。教室を持ったり、人（弟子）を育てるといふようなことは本意ではなかったようだ。古典臨書（中国拓本からの基本を学ぶ）だけはしっかりやらされたものの伝統の重圧を脱した美——書芸術の自由を求めて、書の世界によくありがちな師風追隨も否



莫山先生の手紙より（軸装）

定。まさに自由な不自由さのなかで、楽しみながら、苦しみながら作品創りに励んだ日々が懐かしい。やれ展覧会、やれ研究会——と。入門してから、そんな十年を経て、莫山師から離れて、以後、私は独立独歩、書とデザインのはざままで――

―書的要素を活かしたデザインの仕事、デザイン感覚での書の表現というのが私のライフワークとなっていた。

〈丹波幻想〉

丹波で生まれ、丹波で育ち、昔を思い出して夢を追いかける。

少年の頃の風景、野と山と土のにおい。私は野山をかけ廻って遊んだというより、当時の「少年」「少女」雑誌は

たまたま新聞小説等で見る岩田専太郎や志村立美の挿絵に憧れて、そんな真似絵ばかりかいていたという―。今にして思えば、ちょっと変わった子供だったかも。ひょっとして私の今の仕事の原点がこんなところにあったのかも知れない。

柏原高校では、美術を山本茂斗萌先生にお固い書道から、ややも前衛がかった書道は絵にも通じるところがあり、私には

新鮮だった。まさに

描く字、書く絵。こ

んな高校時代の体験や思いが、後に同じ書の系統であった莫山に師事することにつながる。

〈丹波の雪〉

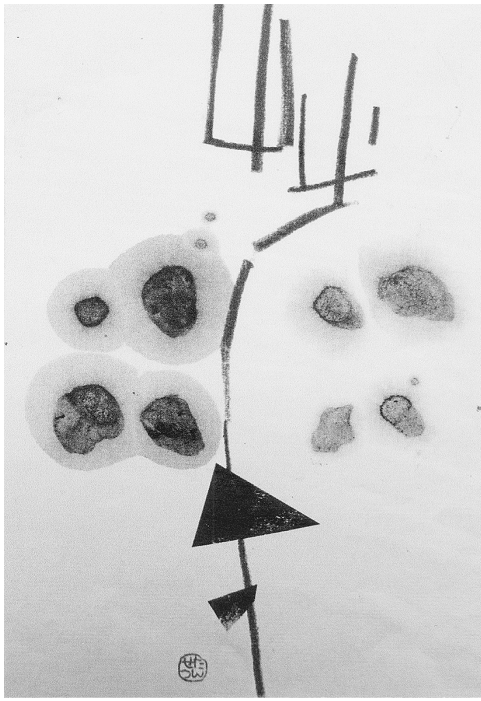
雅号なんて、とんでもないと思いつつ

も、莫山師の推によって「丹雪」と。いかにも書家気分で嬉しくなり、より書道に励みがかかった。

雪の多かった頃の丹波。昔、赤米が多く作られていたとか丹（あか）。古代の稲穂が風で波となる。私の本名幸裕の雪にひっかける。丹（あかい）雪なのかも知れない。誰の許しも得ず、恐れ多くも雅号としていただいていたしまった。時々「淡雪」なんて手紙をもらって苦笑している。

〈書とデザインのはざままで―〉

展覧会芸術のための書が隆盛を極める一方で、もっと身近かな生活の周辺での何げない暮らしの書は、伝統的な書や芸術書に響きあいながら、広範囲に活用され、生活を豊かに彩っている。看板、商品パッケージ、映画、テレビの題字などあらゆる広告物に限りなく人の目に近い分野で「書的美」がよみがえる。ますます



丹雪作「華」

す多様化する、さまざまな書体、書風を、条件、制約のあるなかで、色々なニーズに答えていかなければならない。そんななかでの私の仕事——マスメディアに於てよく知られるものに、サントリーウイスキー「響」。NHK大河ドラマ「新選組！」の題字等。光栄にも本誌会報「たんば」の題字。また、丹波自治体や企業さんに書かせてもらったものは、いずれも私にとっては宝物である。

〈墨象と伝統の書〉

もう一方でアートとしての作品（伝統の書及び墨象作品）。白と黒の世界からかもしだされる気韻、生動。余白や空間からたちのぼる筆致の美しさを神髄とする。デザインの仕事の拘束性から逃れるかのように、自由で自己満足としかいえないような作品作りをする。そんな作品を並べた個展二十数回、グループ展など。うち昭和五十五年には、丹波文化会

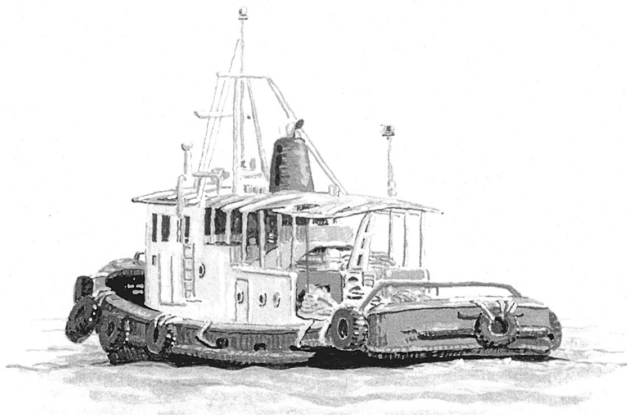
館、平成三年春日町一〇〇日文化祭等で、地元の方々に観ていただいた。マスメディアを通してのデザインのうちの仕事とアートとしての私の表現。その目的や価値感の異なる二つの世界のバランス加減が、微妙に私の中で、私自身を支配している。

〈道はまっすぐ？〉

「ふり返れば道はまっすぐ」——か、どうかは？。人生の山坂、出会いと別れ、心の明暗……。

私の生まれ育った国領の実家は九月に取り壊し、ふるさとがなくなったような一抹の寂しさもさることながら、これまで地元丹波でいただいた色々なご縁はいつまでも大切にしたいと思っています。

（本名荻野幸裕 春日町出身、大阪市在住）



落語家になって20年

100%丹波産の自分

笑福亭由瓶



が家はどちらかと言うと貧しい家でした。兼業農家で田んぼがありましたので、ごはんはいつもお腹いっぱい食べさせてくれました。おかずは少なかったですが、ご飯は大盛りで何杯でもおかわり自由！今でも一番の好物はあったかごはんです。

今年46歳になります。高校を卒業して直ぐに丹波から大阪に出て来て28年。丹波で過ごした18年より10年も長く「都会」で暮らして参りました。亡くなった父には申し訳ないことを申しますが、我

兵庫県立柏原高校に進学しました。中学までは勉強は好きでした。しかし、高校の受験勉強に全くついて行けず、放課後は夕方6時までの部活動と自転車で片道30分「立ち漕ぎ」の通学で帰宅してご

飯食べてお風呂入ったらあとは朝まで寝るだけ。3年の終わりには完全におちこぼれて授業も先生が何をおっしゃってるのか全く理解出来ておりませんでした。就職先も何も決まらないまま大阪へ。しばらく「フリーター」をしてなんとか生活していました。そのとき『社会的な立場のない者にはこんな世間は冷ややかなものか……』と言うのを痛切に感じました。21歳の時、アルバイトでお世話になっておりました食品会社に正社員にして頂き、26歳まで「営業マン」として働きました。小さな会社で給料も普通でしたが、『毎日早起きして行くところがあった、毎月きちんとお給料が貰える』。『社会的に自分の居場所がある』。彼女も居てましたし、それなりに幸せを実感して、もうこのまま『普通のサラリーマンで一生を終えるんやな』となんとなく思っていました。

25歳の頃、だいぶ仕事にも慣れ、「ローン払い」でホンダのスポーツタイプを新車で買い、得意先にも可愛がって頂ける様になり、ちょっと女の子にもモテたりしてこの頃、「人としゃべったり、笑わせたり楽しませたりする」のが好きな自分に気がきました。そんな時、大好きだった今の「師匠・笑福亭鶴瓶」がテレビに出ているのを見て、『こんな風になりたい！自分もなれる!!』と思い、お世話になった会社に頭を下げて退職し、弟子入りして「落語家」になりました。

26歳で入門して今年で落語家生活丸20年になります。『師匠みたいにテレビやラジオにいっぱい出て人気もんなる!』と言う入門当時の思いからは随分と現実はかけ離れておりますが、なんとか「生業」としてやっております。人生2回目の結婚で1人娘は小学1年生です。娘が産まれた時、『父ちゃんの落語全然おもしろいわあ』と言われない舞台

をせなあかんと思いました。尊敬されたり、大好きなんて思われなくても、『父は落語家です。』と堂々と言うてもらえる様な落語をせなあかんと今も強く思っております。

高校を卒業するまでの18年間、「家が貧しい事、家がボロボロでトイレが外にあって汚くて臭かった事、田舎の中の田舎の村で育った事、どこを見ても周りには山と田んぼしかない事」とにかく何もかもが嫌で、当たり前のように28年前丹波を出ました。正直、両親のこともあまり好きではありませんでした。46歳、人の親にもなり、「オッサン」となった今、健康で「大きな声」に産んでくれた両親に感謝しております。

落語家になり20年、『楽しいなあ』『幸せやなあ』と思うことがほとんどです。若い時は全く仕事がなく、前の妻は愛想を尽かして出て行ってしまいました。

キャリア10年くらいでそこそこの舞台にも自信がついて来てなんとか収入も増え、一人前としての「プライド」も芽生えて来ました。それでも情けない思いをしたり、つらいことや、嫌な事を言われたり、まったくウケなかったり……そういう時、いつも「自力」で乗り切って参りました。そのエネルギー源は、私が『丹波の田舎もんで貧しい家でおっきなっからや!』と自負しております。もし私が

「シテイボーイのお坊ちゃん」やったら落語家になってなかつたと思えますし、途中でやめてたかもわかりません。

改めて思います。私の「血肉・魂」は「丹波の土」で出来たもんで形成されています。笑福亭由瓶は「100パーセント丹波産」です。そんな僕を拵えてくれた丹波と両親に心から『ありがとう』。(本名由良宏人 氷上町出身、大阪府寝屋川市在住)

胸ときめかせた柏原劇場

清水 雅子

柏原の八幡さんのすぐ下に柏原劇場と呼ばれる映画館があった。畳の棧敷に花道、廻り舞台のある立派な劇場で、映画のほかに、たまには日本舞踊の会や子どもバレエ教室の発表会にも使用された。跡地には今、商工会館が建てられている。

さて、この映画館で私が初めて観た映画は、美空ひばり主演の「りんご園の少女」。主題歌の「りんご追分」は戦後最大のヒット曲として七十万枚を売り上げた。当時、ひばりは十五歳の少女。私がこの映画を観たのはおそらく六歳。畳敷きの映画館なので、いつも座布団を抱え

て行った。はっきりと映画の筋を覚えていたのではなく、ちょっとしたハプニングがあったので記憶に残っている。

一緒に観ていた子の母親から、みかん水をもらった。昭和二十八年のこと、まだジュースとは言わない。甘酸っぱくてミカンの匂いのする飲み物で、普段には買ってもらえない。サイダー瓶より一まわり小さなみかん水を抱えて、惜しみ惜しみ飲んでいたのだが、手からすべって半分以上をスカートにこぼしてしまった。「こぼしてやないかと思とったわ、もう」と母から叱られ、楽しいはずの映画見物も台無しに。湿ったスカートのま

ま続きをみたような、見なかったような、そこで記憶が途切れている。

この映画館には、私と同年代の子どものいる一家が最上階の、多分芝居の時には役者たちの化粧や着替え、時には泊まり込んだ部屋に住んでいた。映画の切符を売ったり、小さな売店で菓子や飲み物を売ったりしていた。ガラスの瓶に入った、大粒のザラメ玉が好きで、映画は見ない時でも売店には時々買いに行った。

何度かその最上階の部屋に遊びに行ったことがある。狭くて雑然として普通の家とは違う雰囲気になんかあこがれたが、母に言う「あんたは何処へでも行く子や、もう行ったらいかん」と叱られた。

昭和三十年代は映画の全盛期で、美空ひばりや中村錦之助、大川橋蔵など、子ども同士で話題にした。西市庭の端に映画の看板がかかると、「なあー、あの映画連れて行ってーな」と父母に頼んだ。父は東映のチャンバラ映画、母は松竹や

東宝の小津安二郎の文芸作品が好みだったので、色々なジャンルの映画を観た。テレビのまだ普及していない時代、我が家から映画館へは歩いて五分という地の理もあり、今も映画好きなのは、そのせいかもしいない。

文部省推薦映画だと、学校の判を押しした割引券が貰えた。石原裕次郎、小林旭などのアクション映画は中学生になった頃だった。加山雄三のデビューした頃の映画が柏原劇場でみた最後の映画だったような気がする。彼のデビュー作は一九六〇年だから、私は高校時代まで柏原劇場で映画を観ていたみたいだ。

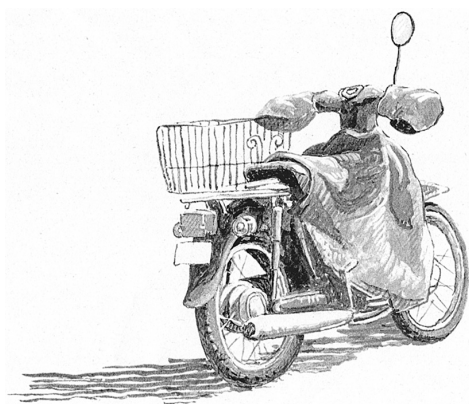
福知山の映画館だと、大きなパノラマという大スクリーンで洋画が観られると聞き、連れて行ってもらったこともある。旧訳聖書を元に作られた「十戒」の迫力にはとても感動した。大学を卒業する年の正月、神戸で父と観たミュージカル映画「チキ・チキ・バンバン」、私が

名古屋へ嫁ぎ、母が訪ねて来た時に観た「チャイコフスキー」など、映画にはその当時の思い出がたくさん詰まっていることを改めて思う。

美空ひばりが亡くなったのは二十八年前、石原裕次郎は三十年前になる。今もって彼らの映画や歌が愛され続けていることの素晴らしさ。彼らは本当の意味の煌

めくスターだった。柏原劇場の小さなスクリーンは私の映画遍歴の原点でもある。テレビ画面が大きくなり、映画チャンネルもたくさんあるけれど、映画館へ足を運び、暗がりが始まりを待つときめきこそ、映画の醍醐味のような気がする。さて、今度は何を観ようかな。

(柏原町出身、岐阜県各務原市在住)



夏休みの墓参り

常任理事 芦田敬一

年に1度、夏休みに必ず父の実家に墓参りにいきました。家族（父、私、弟）3人で、バスと汽車を乗り継いでいく年に一度の家族旅行です。養子である父の実家は兵庫県氷上郡（現丹波市）市島町下竹田にあり、代々須原次郎兵衛を名乗っていました。竹田にしかみられない須原一族（注1）は、戦国時代に山陰地方から落ち延びてきたと父は言っていました。

私の家は同じ郡の青垣町佐治にあり、列車は通っていない最寄りの駅は、福知山線の石生という駅で、バスで40分かかります。父の実家へは丹波竹田という駅

でおります。夏の空は青く、真っ白な入道雲は空高くわき上がり、ひはまぶしく、熱く照りつけます。墓参りのときは、いつもそのようなかんかん照りでした。その中を私達はもくもくと歩いていきます。父は白いワイシャツ、白いカンカン帽、手にはせんすを持っていました。私と弟は、野球帽と小学生の時は半ズボンです。

小さい駅舎から出ると、駅前の広場を通らず、草の生い茂っているあぜ道を歩きます。国道に出てからは、遠くに見える、外壁に茶色の木の板がはりつけてある2階建ての目立つ建物をめざします。

その雑貨店で父は、店屋の椅子にすわり話しこみます。その店屋を出て、前の国道を横切り、家の並びの裏手の道を歩きます。そこは、左手には上からの小さな崖（注2）があり、木々が生い茂り、道端には子供の遊び場になりそうな大きな土管が放置されていました。

私の生まれた時には祖父母はいなく、父の亡くなった兄の奥さんである伯母さんが一人で住んでいました。伯母さんに挨拶が終わると、車1台通れる程のなだらかな山道を歩いてお墓に行きます。いつも人を見かけることのなかった静かな道です。しかし、昔の県道で、福知山連隊の兵隊さんの行進を子供の時によく眺めていたと父は言っていました。そう聞くと、この静かな、何十年も変わらないような道を、カーキ色の服を着たたくさんの兵隊さんがざくざくと音をたて、つい今しがた歩いたような気がしていました。

墓地はなだらかに、山の斜面に広がっています。父はどこのお墓に参っても、墓石の文字を読んでいました。ここでも、時々眼鏡をはずし、顔を墓石に近づけて文字に見入ります。「この墓は芦田均さんのおばさんの墓や」、特定して言うのは、この人のお墓と父の父母と兄のお墓です。

墓参りが終わると、隣にある三宮神社に行きます。私達が登ってきた道の反対側は茂みになっていきます。膝の高さくらいの高さの草が生い茂り、所々に背の高い杉が立っています。父が先頭にたち私達は草をかき分け、ついていきます。そこには、蝉の鳴き声と、草や木々にすれる音しかありません。すべらないように、前、横の枝をしっかりと握って歩き、最後に低い石垣をあがります。

そこは、社殿のある場所で、日の照りつける明るい広場になっていました。多分、どこの神社でもするように、柏手を

打ち、鈴をならし、頭を下げたとおもいます。父は近くの神社なので、戦争にいく時とか、その都度その都度、色々な事を祈ったのでしょうか。そして、今の私のように自分の家族のことも祈ったのに違いありません。

社殿から階段をおりたところに鳥居があり、その外には平べったい、黒ずんだ灰色の大きな石碑（注3）があり、表面にはぎっしりと漢字が掘られていきます。それは、何代目かの須原次郎兵衛さんが飢饉の時に米を分けたことを、福知山藩の人が書いたと父は言っていました。

福知山へは、近くのバス乗り場から行きました。そこでは探し歩いて、洋食を食べた記憶があります。その



須原家宅の前で、左より著者、弟、従兄弟達

後に、このあたりでただひとつの百貨店である三つ丸に行き、なにかお土産を

買ったのでしよう。そしてまた列車に乗るか、あるいは中丹バスで榎峠を越えて佐治に帰ります。帰宅は夕方、これで夏休みのイベントのひとつが終わるのでした。

(注1) 須原一族は江戸時代から何回か、自分たちの家系図を持ち寄って一族全体の家系図を作っています。

それによりますと、因洲(鳥取県)新田城の城主である須原土城兵衛、橘正明が落ちのびて下竹田に住みつき、今の須原一族に繋がっています。

(注2) この崖の上は、清蘭寺(せいおんじ)の参道です。この寺の境内に南北朝時代の大きくどっしりした石灯籠があります。寺の創建は聖徳太子の異母弟である麻呂子親王の大江山の鬼退治伝承にさかのぼり、寺伝の絵巻物があります。

(注3) この碑は6代目須原次郎兵衛の

事が書かれています。最後に勅書・西垣龍耳撰となっています。西垣家は代々、福知山藩の儒家で、その一族の西垣堯民が福知山商業、福知山成美高校の前身の愛花学舎を明治4年に創設しています。堯民は難聴であり、龍耳を号としたとのこと。

(青垣町出身、尼崎市在住)



「利他」教えてくれた恩師

吉見弘文

昭和四十四年、私は柏原高校に入学した。

私は柏原高校に勤務していた父に連れられた小さい頃から体育祭や文化祭など、折に触れ柏高に出入りし、先生もよく知っていたし校歌や応援歌も歌えたこともあって、正直なところさほど新鮮な感動はなかった。

ところが入学式、体育館の二階でコーラス部が歌う混声四部合唱での校歌の美しさに鳥肌が立った。その出来事が私がコーラス部入部を決めるきっかけとなった。

当時のコーラス部員の多くが異口同音

に「あの入学式での校歌に魅かれて入部した」と話す。

当時のコーラス部には百人ほどの部員が在籍し、学校内でも一大勢力だった。私は正直言って「コーラスなんて女子がやるものだ」という偏見に似たイメージを抱いていたが、部員の約三分の一を男子が占めており、練習もかなりハードなものだった。

通学列車のダイヤの関係で朝七時半に学校に着いた私たちは、まず音楽室に立ち寄って発声練習などをした後、教室に向かったものだった。昼休みも音楽室、もちろん放課後も音楽室だ。

毎日日替わりで地元に住むOBやOGが指導に訪れた。

夏休みには氷上町の達身寺で三泊四日の合宿を張り、朝から晩まで合唱漬け。

もちろんそこにも大学の夏休みで帰省したOB、OGが入れ替わり立ち代り訪れ、練習の指導や食事の準備などに当たるのが恒例になっていた。

大学二年の夏休み。例によって合宿の手伝いに行った私は、音楽の内田修二先生とともに当時コーラス部の顧問だった数学の荻野辰夫先生から呼ばれ、「おまえにご飯の炊き方を教えておくから、これからはお前が飯炊きをやってくれ」と言われ、百人分のご飯を一斗炊きの大きな釜で一気に薪で炊く「湯立飯」の炊き方を伝授された。

ご飯炊き係を任せられたのはいいが、みんながまだ寝ている早朝に起き出して朝ご飯を炊き、午前中の練習時間中に昼ご飯を炊き、午後みんなが練習している間

に昼寝して、みんなが練習を終えて休憩したり遊んでいる間に晩ご飯の準備。つまりみんなと一緒に練習することなどできなくなり、ご飯炊き専門スタッフとなくなってしまったのだ。

しかし私が幼少の頃からかわいがってくれた「辰っつあん」の頼みとあらばむげに断わるわけにもいかず、裏方稼業に徹することにした。

その半年後、辰っつあんが私に白羽の矢を立てた理由を知ることとなる。

ゴールドデンウィークを利用して帰省した私の元に看護学生だった後輩から「辰夫先生、もう長くないわ。明日にでも病院に来てあげて」という連絡が入ったのだ。私は驚いて当時医学部に通っていた同級生に連絡し、翌日病院に先生を見舞った。

末期がんですで意識はなく、主治医だった院長が、「吉見君は荻野先生の無二の親友の息子やし、K君は医者卵や

から病状を説明しとく」とカルテやレントゲン写真を見せて詳細に説明してくれた。その二、三日後、看護学生の後輩から「先生が危篤」という一報を受けて私とK君は病院に駆けつけた。先生は意識が薄れていく中で母校早稲田の校歌「都の西北」を小さな声で口ずさみながら息を引き取られた。享年五十七歳、あまりに早い旅立ちだった。

先生は自分の命が長くないことを知り、私に飯炊き係を託されたのだった。

その遺志を受け継ぎ、私は大学を卒業するまで裏方として側面から後輩たちの支援を続けた。

あれから四十年余り。いまはOB会のお世話をさせていただいている。

ずっと目立たない存在だったと思っていたのは私だけで、OB会の集まりなどで十歳も年下の後輩たちが「昔、一生懸命ご飯炊きをしてくれていた吉見先輩のことは、ほかの先輩たちのことよりよく

覚えていますよ。私たちにお手伝いできることがあったら何でもおっしゃってください」などと言ってくれる。本当にありがたいことだと思う。

荻野先生から教わった言葉がある。

「忘己利他」

——自分のことは後回しにしても他者のために尽くす。

私はこの言葉を座右の銘としている。

それは金融機関から高齢者福祉の世界に身を転じ、改めて先生から教わった言葉の意味がわかったような気がする。

先生の歳を追い越し、還暦を過ぎたいま、私はこれまでお世話になったたくさんの方のために少しでも恩返しができるばと考えている。それが務めだと思っている。

近いうちに先生の墓参にでも行ってこようか。(市島町出身、伊丹市在住)

日本昔ばなしと世相

桃太郎・花咲か爺さん…

理事 清水昭景

総理大臣を始め各界の多くの指導者を育てられたある高名な御方から生前、「日本昔ばなしは子供向けに作られた古事記なんだよ」と聞きました。

昭和六十年豊田商事事件による金の地金を用いた悪徳商法を手口とする組織的詐欺事件が社会問題化しました。この事件のことを大先生は、「日本昔ばなし『因幡の白兔』なんだよ。兔がワニザメを騙した物語」と話されました。

今も「因幡の白兔」の様相を呈している詐欺事件が多発しています。

また、「桃太郎の鬼退治の物語の猿、犬、キジは、本当は人なんだよ。人の名

前で物語を作るとグロテスクになるから動物や鳥の名前でほかしているんだよ」と話して下さいました。

冒頭の日本昔ばなしのお話を通して世相を考察する考え方も教えの中で養われてきました。

では、日本昔ばなし「桃太郎」の鬼退治を通して、現在の世相を語るとどの様になるでしょう。

昨年七月、東京都知事に小池百合子氏が当選しました。都民ファーストを掲げ、次から次と「ドン」をあぶり出しては東京大改革の名の下、鬼退治に出ようとしています。

小池さん、小池さん、お腰につけたキビ団子(選挙の票)一つ私に下さいな(○
○党)

小池さん、小池さん、お腰につけたキビ団子(選挙の票)一つ私に下さいな(×
×党)

小池さん、小池さん、お腰につけたキビ団子(選挙の票)一つ私に下さいな(△
△党派)

○
○党も×
×党も△
△党派も、欲しいのは選挙の票だけ。当選したいだけ。信念は危ういものです。三匹(人)と一緒に無事鬼退治が出来るのか注視しましょう。

ドングリころころドンブリコ、お池(小池さん)にはまってさあ大変。ドジョウ(土壌汚染)が出て来てさあ大変。坊ちゃん(石原さん)一緒に遊びましょう。

豊洲への移転問題で都議会百条委員会が設置され、三月に石原元東京都知事の証人喚問が開催されました。

石原慎太郎氏は、「太陽族」で世に出、巷の神々の本を出版。巷の神々がやっと表に出られると後押し。最高得票三百万票で国会議員に押し上げられ、大臣もしたけれど何もしてくれなかったと、巷の神々の失望をかった。

弟石原裕次郎氏も太陽族としてスクリーンに登場し、「太陽に吠えろ」等々で一世を風靡したが、慶応病院の屋上でファンに手を振った時が最後の姿となった。その意味を石原慎太郎氏へ忠告しても何もわからなかったし、行動に移さなかった。その後石原裕次郎氏は死亡。結果国会議員を辞職し、東京都知事となるも、週二日程度しか都庁へ出勤せず、その様な執務を十三年間も続け、権限、責任の多くを都職員に委ねた形となった。都職員と都議会との馴れ合いが生じ豊洲移転問題は曖昧模糊として、責任は一体どこにあるのか、誰も責任を取らない行政機関となっていた。

本来の意味での鬼退治とは何か。税金の使い道は真摯に神聖であるべきである。それに対する権限、責任は一体誰が負うのか、最終責任者とはどういうことか。

私事ばかりが目につく議会等々行政は上へ上がれば上がる程、責任が拡散してしまう組織となっている。これは千三百年続く律令制度以来の悪しき伝統による、悪知恵の結果なのです。百条委員会が都議選へ向けてのパフォーマンスショー的な色彩が強く、これでは議会も知事も市場を政争の具としていと言わざるを得ません。猿、犬、キジの登場人物は見せられても小池知事の今迄の言動では桃太郎には成りきれないだろう。本当の鬼退治にメスが入るまでもう少し時が必要かも知れない。

森友学園の問題は「花咲か爺さん」の物語として語りましょう。

正直者のお爺さんとお婆さんが可愛がっていた白い犬が「ここ掘れワンワン」と言って掘った所から、大判小判がざっくざく。それを見ていた欲の深い意地悪爺さんと婆さんが「犬をかせや」と言って無理やり連れて行き「ここ掘れワンワン」と掘った所から出るわ出るわ、ゴミの山。怒った欲の深い意地悪爺さんと婆さんは犬を殺してしまいました。

正直者のお爺さんとお婆さんは供養し埋葬しました。そこから木が生え、大木になりました。その大木を切って臼を造りました。お餅をつけば、そのお餅から大判小判がざっくざく。それを見ていた欲の深い意地悪爺さんと婆さんは「その白かせや」と言って無理矢理取って行きました。お餅をつけば出るわ出るわ、ゴミの山。それに怒った欲の深い意地悪爺さんと婆さんは斧で臼を割って燃やしてしまいました。不憫に思った正直者のお爺さんとお婆さんは灰をかき集めぱーつと蒔いた灰は、枯れ木に花を咲かせまし

た。

噂を聞きつけた殿様はあっぱれあっぱれと褒めたたえました。それを見ていた欲の深い意地悪爺さんと婆さんは「枯れ木に花を咲かせましよう」と言っただけで灰をかけました。それを見ていた殿様に灰がかかり、殿様の顔は灰まみれ、真っ黒になりました。

以上が「花咲か爺さん」の日本昔ばなしです。

正直者のお爺さんとお婆さんの行いは大判小判がざっくざく。この意味は教育によって多くの人材が世の中に排出され光り輝き、社会で大きく花が咲き、社会貢献をしたことを示唆しています。吉田松陰、大隈重信、福沢諭吉等多くの先人が教育に情熱を注ぎました。

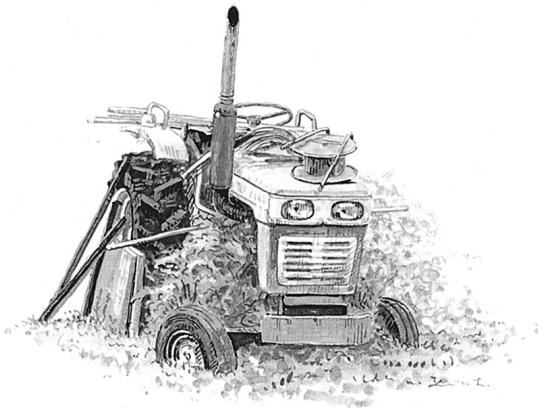
丹波においても、女子教育の先覚者三人、井上秀・公江喜市郎・村上専精の功績を丹波新聞社社長荻野祐一氏が関西西丹波市郷友会会報第一号に寄稿されています。

す。

では欲の深い意地悪爺さんと婆さんは誰でしょう。連日ワイドショーで取り上げられている籠池氏夫婦の事かも知れません。「ここ掘れワンワン」と言っただけで建築予定地から出るわ出るわゴミの山。「もっと安くしろや」と言っただけで財務省理財局と交渉。籠池氏も偉人になりたといと、教育勅語と首相夫人を金集めのために利用して、「枯れ木に花を咲かせましよう」と言っただけで、パートと蒔いた灰で殿様（安倍首相）の顔は灰まみれ。一件落着するのはいつのことやら。問題が山積する中、つまらぬ事で足元をすくわれない様にせねばなりません。

その様に日本昔ばなしを通して少し視点を変えて世相を見れば、なる程と案外真実が掴める事が多々あるのではないのでしょうか。

(山南町在住)



さまざまな国境を歩く

日本では体験できない感慨

常任理事 山口直樹

日本は島国で、陸上での国境というものが無い。小さい頃より、「国境」というものに興味があった。これまで見てきた「国境」というものについて、記したいと思う。

【38度線】

まず、思い浮かぶのは、1972年当時の韓国と北朝鮮の国境（正式には、休戦ライン）がある板門店。今思い出しても、ここは実に厳しい国境だった。会談場の長テーブルの真ん中に線が引いてあって、ここが休戦ライン（38度線）だと言っていた。向こうには、北朝鮮の兵



板門店の休戦ラインから。こちら側韓国、川向こうは北朝鮮（1972年）

士が、銃を構えて、ずっと睨んでいた。机の真ん中の休戦ラインより先には行くな、北の兵士を挑発するようなことは

するなど、何度も注意された。何があってもおかしくない、緊張した雰囲気だった。この休戦ラインの南側を警備しているのは、国連軍兵士のアメリカ兵だった。この休戦ラインに来るには、「もし、戦闘に巻き込まれて、死んでも文句は言わない。」という、誓約書を書かされた。

ここに行くには、非武装地帯に入って、橋を渡るのだが、この橋は大変狭くまた、橋の途中がL字状に曲げられていた。これは、戦争になったとき、敵の戦車がこの橋を渡れないようにするためだと言っていた。朝鮮戦争が終わって20年ほど経った頃だったが、その当ても休戦ライン（今も休戦ラインのままだ。）であって、国境ではない、ということに、驚きを感じた。未だに戦争状態なのだということ強く感じた。

これ以外にも、当時は韓国全体に「夜間外出禁止令」というものがあり、夜中の0時から朝の5時までは、外出しては

いけない、もし違反すれば逮捕されると言われていた。一週間に一回「粉食の日」というのがあり、各家庭でも食堂やレストランでも米の粒は食べられなかった。これは、当時、韓国で米が不足していたためだと聞かされた。

釜山からソウルにいく道路が、時々中央分離帯もなく幅も広く真っ直ぐの場所があった。これは戦争になったときに、臨時の滑走路になるのだと聞いた。自分の中では、戦争はもうとっくの昔に終わった事だと思っていたが、この旅をしたことで、戦争を身近に感じるようになった。

【カナダとアメリカの国境】

はじめて自分の足で国境を越えたのは、アメリカとカナダの国境だ。1974年6月。ナイヤガラ滝を見に行った時、アメリカとカナダを結ぶ橋の上に白い線が書いてあり、その両側にUSA、CANADAと書いてあった。僕は、こ

の白い線をまたいで写真を撮った。国境をまたいで旅をするとは、こういうことだと一人悦に入っていた。

橋のたもとはアメリカとカナダの国境管理事務所があり、通る人のパスポートをチェックしていた。和やかな雰囲気だった。国境を越えるという緊張感は全然なかった。ナイヤガラ滝は馬蹄形の大きな滝がカナダの側で、アメリカの滝は直線形をしていて、カナダの滝より小さい。ナイヤガラの水量はもの凄く、滝壺に落ちる水の音はすさまじいものがあった。その大きさに圧倒された。

【東西ベルリンの壁】

1976年8月、ベルリン。当時は東西に分かれていた。そして有名なベルリンの壁があった。この国境も厳しかった。東西ベルリンを通過するには、何か所かあるチェックポイントを通すなければならぬ。僕が通ったのは、フリー

ドリッヒシュトラッセにあったチェックポイントだ。その時、僕は、ポーランドの友人の家族とポーランドから東ベルリンに来て、そこに滞在していた。ところが、僕は東ドイツのビザがなかったので、24時間以上東側に滞在できない。そこで何度かこのチェックポイントを通じて、またその都度、通行料を支払って東ベルリンに戻っていた。

当時、東と西は街の雰囲気も店の商品



今は観光客が押し寄せる旧東西ベルリンの壁（2014年）

種類も全然違った。東ベルリンの中心街にあった「コスモス」というデパートは東側のショウウインドーといわれ、普通東側では手に入らない商品があった。そこで、それらの商品を買いに東ドイツの人だけでなくポーランドやその他の東側の国の人も買い出しに来ていた。しかし、西側に住んでいる僕から見ると、どれも大したことないものばかりだった。東側の貧しさを実感した。

東側でベルリンの地図を買うと、西ベルリンは一切書いていない地図だった。西側で買うとベルリン全体が印刷してあった。日本国籍の僕は、西ベルリンへのチェックポイントを越えられたが、ポーランドの友人は西側へ行くことが出来なかった。ブランデンブルク門はベルリンのシンボルだ。この門が壁の一部だった。だから、門といっても通過できない門だった。僕は、ブランデンブルク門を東側のウンターデンリンデンと西側



東ベルリンから壁を越えて脱出しようとし、射殺された人たちの写真が壁公園に残されている（2014年）

のティアガルテン側の両方から見た。1976年当時、この壁がなくなるなどということは想像も出来なかった。それが1989年、当時の政治家が話し合い、戦争によらずに、平和的に東西のドイツが統一され、壁もなくなった。当時の指導者の努力に脱帽する。ベルリンの壁は東西ベルリンを分ける壁だが、それ以上にひとびとの心に重くのしかかって来るものがあった。この壁を越えようと

してたくさんの方が東ドイツの警備兵に殺された。

2014年に行ったとき、壁はなくなっていたが、壁があったところには、壁そのものが記念として残されていたり、記念碑があったりした。また、「ここで、誰が、いつ殺された」という立て札がたくさん建っていた。ここで命を落とした人がこんなにも多くいたのかと、心が痛んだ。東西ドイツには、同じドイツ人が住んでいたはずなのだが、政治体制が違うと人々の表情も違うのだな、と思った。東側は色々な種類の制服を着た人が多く、何となく威圧的な雰囲気だった。

【メキシコとアメリカの国境】

エルパソ。アメリカとメキシコの国境にあるアメリカ側の街。ここから、歩いてリオ格蘭デ川を渡るとメキシコだ。アメリカからメキシコに行くときは簡単だった。

メキシコに入学して街を歩いていると、「ペニー」「ペニー」と大声を出しながら、子供達が近づいて来た。子供の乞食が、観光客にお金を要求しているのだ。かわいそうと思う以前にその迫力に怖さを感じた。ちなみに「ペニー」とはアメリカの貨幣の1セントコイン（当方で3円）のことだ。

夕方、アメリカに戻ろうと思って再び国境検問所に行ったが、そのチェックの厳しいこと、また、時間のかかること。うんざりした。今でもそうだと思うが、アメリカはメキシコからの不法移民が多いので、アメリカへの入国審査は特に厳しい。そのとばっちりで僕もすぐく待たされて、うんざりした。

【デンマークとスウェーデンの国境】

1974年、デンマークのヘルシンガー。たばこが好きな人は、たばこの入手に本当に苦勞していた。何しろ当時1箱

20本入りが約850円していた。（当時のレートは1USDドル300円。）多分当時の日本では、150円くらいだったと思う。この値段は隣のスウェーデンでもほぼ同じで、政策として極端に高くしていたのだろう。但し、両国間を行き来するフェリーボートの中では免税になり、一人3箱まで半額以下で買えるということだった。

ある日学校（当時僕は国際学校の学生だった）で、友人が「1時間くらい時間ある？」と聞いてきた。彼が言うには、「フェリーと一緒にたばこを買うに行って欲しい。フェリー代は出す」とのこと。興味があったので行ってみた。ヘルシンガーは港町で、対岸はスウェーデンのヘルシングボルグという街である。その間を、フェリーボートが約20分で結んでいる。このフェリーボートは列車も運ぶことが出来る大きなもので、デッキに線路がある。また、このフェリーボートは、

船体が前後同じで、ブリッジが前後に2つあった。スウェーデンに行くときのブリッジとデンマークに行くときのブリッジを使い分けているのだ。

たばこを買いに外国へ行く、ということが、ごくごく身近で日常的な風景なのだ。四方を海で囲まれた日本で育った僕としては、実におもしろい体験だった。

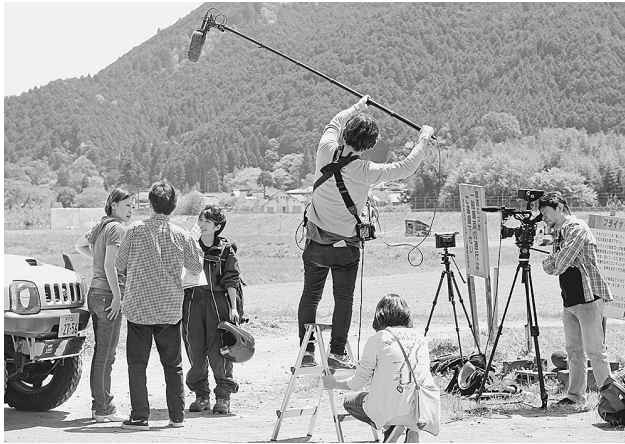
この彼のために、何度もたばこを買いにスウェーデンまで行った。このヘルシンガーという街には有名なクロンボルグ城というのが海に面して建っている。この城はシェイクスピアのハムレットで有名だ。ヘルシンガーという地名はデンマークの名前で英語ではエルシノアという。ヘルシンガーとヘルシングボルグの間の海峡は、北海からバルト海に入る為の唯一の海峡で、昔はここを通る船から通行料を取っていたそうだ。

（氷上町在住）

100年後の子らに届けたい

今、目にする丹波の姿

映画「恐竜の詩」監督 近 兼 拓 史



4月から始まった「恐竜の詩」撮影風景
(青垣町で 丹波新聞提供)

神戸の長田区という下町に暮らしていたのが、「丹波」という地名を初めて聞いたのは、1970年、ちょうど小学校3年生の時でした。

当時神戸市は、大阪万博のテーマ「人類の進歩と調和」を具現化する様に、インフラの近代化にやっつきで、下水道化率100%、道路の舗装率100%を達成し、その成果を自慢げに全国にPRしていたころです。

僕の家の中の細い路地もアスファルトで舗装され、ついつい友だちと話や遊びに夢中になっては落ちた側溝も、コンクリートの蓋で覆われ安全になりました。

これにより毎年の風物詩だった、夏前にボウフラ対策の為に各町内で行われた側溝やドブへの殺虫剤の噴霧機散布も不要になり、衛生的にもなりました。

しかし、アスファルトとコンクリートで蓋をされた無機質な景色は、子供心にも寂しく、ビー玉はおろか、ドロ団子一つできない路地を前に「これから何をして遊べばいいのか」と愕然とし、今まで土の道を歩いていた時には感じなかった、アスファルト舗装の通学路を歩くと足の裏が痛くなる感覚に、「未来の世界は厳しいなあ」と感じたものでした。

当時、夏休みになると学習漫画「昆虫の世界」をすり切れるまで何度も読んでいた僕は、凶鑑の中でしか見たことの無い憧れのミヤマクワガタやノコギリクワガタの姿を自由帳に何度も書き写しては、いつかは山でホンモノと出会う日を夢見ていました。しかし、アスファルトとコンクリートに覆われた街では、カブ

主役の「澤田」家の人たち



トムシやクワガタムシはおろか、セミの声すら聞こえなくなっていました。

当時の子供達の、夏の自由研究の定番だった昆虫採集もままならず、一夏かかって手に入れることができたのは、公園で捕まえたアブラゼミ1匹と、セミの抜け殻3個。1日中近所の山を駆け回っ

てようやく見つけたカナブン2匹。そして、見るに見かねた両親にデパートで買ったもらった小ぶりのカブトムシのペアが、コレクションの全てでした。

当時の長田区はケミカルシューズ産業の全盛期。県内各地から出稼ぎのおじさん達がやってきていて、毎日ゴムの粉をかぶって真っ白になりながら働いていました。そんな出稼ぎのおじさん達から聞いたのが「丹波」という地名でした。そこからやってきたという白いオジサンが言うには「カブトムシなんて、獲りに行かなくても、夜窓を開けてたら勝手に飛び込んでくる」「街灯のそばに行けば、いくらでも落ちている」という宝の山の様な話でした。

「そんな夢の様な場所が本当に在るのか!？」と憧れに憧れた僕は、何日も丹波の話の聞きにおじさんの元に通い、ついに両親の許可を得て真夏の深夜、丹波の山に行く機会を得ます。

山道をエアコンの無いクルマに揺られること数時間、途中2度の居眠りの末、

「着いたよ」の声で飛び起きたのは、山の中にポツンと水銀灯の街灯がある路側帯でした。しかし、そこで見た景色は、黒いタイルの床のように、地面一面に群がるカブトムシやクワガタムシの姿でした。持参した昆虫採集の網も必要ありません。ただただ地面に落ちている無数の金貨を拾い集める様に、持参した虫かごにカブトムシやクワガタムシをつめて行きます。10分も立たぬうち、虫かごは反対側が見えない程一杯になりました。

「どや、ホンマやったやろ!」というおじさんの言葉に大きくうなづき、家路に戻るようになりました。

虫達のギシギシというこすれ合う音で子守唄に家に着いたのは、もうラジオ体操が始まるころでした。興奮さめやらず、虫かごを持ったままラジオ体操に向かい、近所の友だちや子供たち10人あま

りズラズラと引き連れて家に戻って、大きな木箱に虫達を移します。

カブトムシの雄が21匹。メスが8匹。ミヤマクワガタのオスが16匹。ノコギリ



出演者、スタッフら。手前右から2人目近兼監督。武田丹音さんⅡ同中央、吉竹仁人さんⅡ同左端ら地元スカウト組も（丹波新聞提供）

クワガタのオスが10匹。何クワガタのメスか分らないけど、メスのクワガタが10匹。付いてきた友だちや子供たちに1匹ずつ分け与えると、「タンバ」の噂はアツと言う間に学校中に広まり、名前も知らない上級生まで家に押しかけ、母親がキャラメルを与えて彼らに帰ってもらう騒ぎになりました。

その日から長田区界限の子供達に「タンバ」という宝の山が伝説となったのはいうまでもありません。

今年映画の撮影の為45年ぶりに子供たちをつれて早朝の丹波の深山に分け入り、数匹のミヤマクワガタやノコギリクワガタに会うことができました。その姿にホッとするとともに、あれほどたくさんいたカブトムシやクワガタムシが、深山を探しまわってやっと数匹…という現状に、今の丹波の姿を後世に残さなければいけないという決意を新たにしました。この環境の変化は、45年という年月の

協賛金を募集中

映画「恐竜の詩」製作員会は、製作費に充てるため個人(1万円から)、企業(10万円から)様による協賛金を募集しています。協賛いただいた方にはエンドロールに名前を掲載させていただきます。振込先(名義は有限会社ダカーポ)は

三井住友銀行 世田谷支店
普通5589026

ゆうちょ銀行記号14280番号3434111

よろしく願い申し上げます。

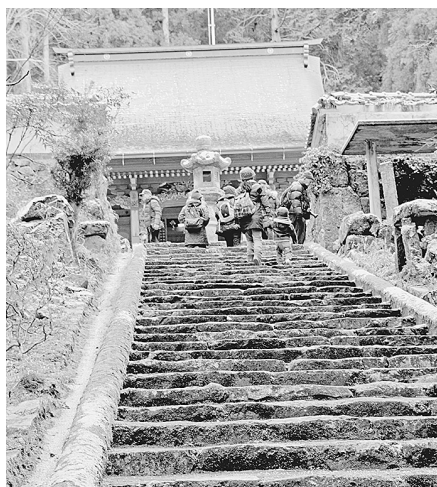
成せる技だけではありません。最もカブトムシやクワガタムシが獲れたという市島が、平成26年8月豪雨で大きく傷ついたことが大きいと聞きます。

今目の前にある美しい丹波の景色と環境、その姿を100年後の子供達に見せた時、「今と同じだね」と言ってもらえる未来がくることを願ってやみません。(丹波市を舞台にした映画「恐竜の詩」Ⅱ平成30年春全国公開予定Ⅱを製作中)

常勝寺の鬼こそ

監事 足立 壽宏

(表紙の写真も)



(右) 勢ぞろいした4匹の鬼と法道仙人

(左上) 「火合わせの業」で厄払いする赤鬼

(左下) 長い石段を上っていく参拝者ら

鬼こそ（追難式）が行われる寺は竹林山常勝寺（天台宗）。丹波市山南町谷川にあり、春は桜、秋は紅葉の名所でもある。毎年2月11日に執り行われ、丹波一円ならず京阪神からの参拝者も多い。祭典の行われる本堂は真つすぐな石段を約350段登った所にあり、午後1時から祭りが始まる。

この奇祭の由来は大化年間（645〜650）、インドより渡来した法道仙人によって開基されたと伝えられ、当時付近の山々に悪鬼が現れ里人に危害を与えていたのを、仙人の法力で悪鬼4匹の体に細紐を縛り付けて改心させたことから始まる。その鬼たちを使って厄払いの行事が行われるようになった。よって鬼こそは節分の厄払いの一端とした無病息災、五穀豊穣のお祭りである。

当日は大般若転読法要の後、細紐で縛られた4匹の鬼たちにより行事が執り行われる。第一の赤鬼には松明が与えられ、鉾、大刀、錫杖、を持ったそれぞれの鬼たちが堂内で餅きり、火供え、火合わせ、面合わせ等の厄払いをする。法道仙人を先頭に4匹の鬼たちは堂外の回廊に出て鐘、太鼓、ほら貝、木魚等の鳴り響く中、滑稽な歩き方で六法を踏み鳴らすような力強い足取りで回廊を一周し、最後に赤鬼が持つ松明を庭内の参拝者の方に投げかけ、クライマックスとなる。この松明を拾った参拝者は一年の無病息災のおかげを受けるといふ。



大般若転読法要の間、出番を待つ鬼たちの面

広告目次

協賛ありがとうございました。(敬称略)

サンキン……………裏表紙	丹波総合石材…………… 85
三協運輸……………表表紙裏	大 和…………… 86
丸十ロッカー……………裏表紙裏	喜 作…………… 87
まちづくり柏原…………… 69	ル・クロ丹波邸…………… 88
中兵庫信用金庫…………… 70	有田産業…………… 89
JA丹波ひかみ…………… 71	エス・ディー…………… 90
敬 愛 会…………… 72	サンキンB&G…………… 91
小曾根病院…………… 73	丹波新聞社…………… 92
円 応 教…………… 74	やながわ…………… 93
武庫川女子大学…………… 75	ヤマウチ製菓…………… 93
大地農園…………… 76	岡林写真館…………… 94
山名酒造…………… 77	大 仏 堂…………… 94
土田商事…………… 78	オオツキ…………… 95
木 栄…………… 79	谷水加工板工業…………… 95
オーケンウォーター…………… 80	清水一級建築設計事務所…………… 96
グリーンライフコーポレーション…………… 81	丹南茶寮…………… 96
松井商事…………… 82	たんばコミュニティエフエム…………… 97
オフィスキムラ…………… 83	関東氷上郷友会…………… 97
富田畜産…………… 84	



ロマン城下町かいばら

私たち株式会社まちづくり柏原は、地域住民の声を聞き、柏原の歴史文化にあったまちづくりに取り組んでいます。「丹波市らしさ」「柏原らしさ」を大切にし、住民たちによる様々な活動により生まれる魅力によって、柏原を訪れる人や新しい住民を増やすきっかけになると考えます。私たちは地域開発のプロデューサーとして、住民、商業者、行政をはじめ多くの人々と連携し、精力的にまちづくりを進めます。



■テナントミックス事業



■町なみ環境整備事業



■関西学院大学連携事業

代表取締役：荻野吉彦(荻野与作商店 代表取締役)
取 締 役：土田博幸(㈱土田商事 代表取締役)
：前川隆正(㈱丹波の森ショッピングタウン 代表取締役)
：岡林利幸(㈱オカバヤシ 代表取締役)
：土田光一(㈱土田化学 代表取締役)
：菊本裕三(きくもとグラフィックス㈱ 代表取締役)
：黒田好信(黒田測量設計㈱ 代表取締役)

株式会社まちづくり柏原

〒669-3309
兵庫県丹波市柏原町柏原688-3
TEL:0795-73-3800
FAX:0795-73-3801
HP: <http://www.kaibara.org/>

まちづくり柏原
直営店

イタリアという国の食文化が多様な郷土料理の集合体であるように、オルモも丹波に支えられ、生かせるものでありたいという思いでお料理を提供しています。都会にはない素朴で上品で、心落ち着くイタリア料理店です。

TEL.0795-73-3800
〒669-3309 兵庫県丹波市柏原町柏原688-3
HP: <http://www.kaibara.org/>

olmo イタリア料理





NAKASHIN

あなたとまちとフェイス to フェイス

中兵庫信用金庫

理事長 足 立 厚 郎

〒669-3693

兵庫県丹波市氷上町成松226-1

Tel (0795) 82-8850(代)

ゆ め
希 望 と



う る お い の あ る

ま ち づ く り

 JA丹波ひかみ

代表理事組合長 荻野 友喜

〒669-3461 兵庫県丹波市氷上町市辺 440

TEL:0795-82-0170 FAX:0795-82-3658

URL : <http://www.ja-tanbahikami.or.jp/>

敬 愛 会 人 法 療 医

理事長 大塚 久喜

本部 〒669-1333

兵庫県三田市内神525-1(三田高原病院内)

TEL(079)567-5107

救急病院

大塚病院

〒669-3641
兵庫県丹波市氷上町絹山513

介護老人保健施設

ひかみシルバーステイ

〒669-3641
兵庫県丹波市氷上町絹山523

療養型医療施設

三田高原病院

〒669-1333
兵庫県三田市内神525-1

療養型医療施設

三田温泉病院

〒669-1353
兵庫県三田市東山897-2

介護老人保健施設

三田温泉シルバーステイ

〒669-1353
兵庫県三田市東山897-1

介護老人保健施設

神戸ポートピアステイ

〒650-0046
兵庫県神戸市中央区港島中町5-2-3

介護老人保健施設

豊岡シルバーステイ

〒668-0065
兵庫県豊岡市戸牧1132番地2

療養型医療施設

西宮敬愛会病院

〒663-8203
兵庫県西宮市深津町7-5



医療法人 豊 濟 会

小 曾 根 病 院

許可病床数 **557** 床

介護老人保健施設 やすらぎ

定員数 **84** 床

大阪府豊中市豊南町東2丁目6番4号 06-6332-0135

理事長 中 川 泰 洋

理事 石 井 和 生

理事 芦 田 昇 治

理事 田 晴 行

理事 遊 佐 裕 子

院長 西 元 善 幸

老健施設長 立 花 暉 夫

教団基本方針
「笑顔で一人がひとりを幸せに
今こそ実践世の道具」

平成30年「立教百年祭」



(えんのうきょう)

円 応 教

教主 深田 充啓

〒669-3142

兵庫県丹波市山南町村森1-1

TEL. 0795-77-0430

ホームページ / www.ennokyo.jp



大 学

文 学 部

日本語日本文学科
英語文化学科
教育学科
心理・社会福祉学科

生活環境学部

生活環境学科
食物栄養学科
情報メディア学科
建築学科

健康・スポーツ科学部

健康・スポーツ科学科

音 楽 学 部

演奏学科
応用音楽学科

薬 学 部

薬学科
健康生命薬科学科

看 護 学 部

看護学科

短期大学部

日本語文化学科
英語キャリア・コミュニケーション学科
幼児教育学科
心理・人間関係学科
健康・スポーツ学科
食生活学科
生活造形学科



武庫川女子大学
武庫川女子大学短期大学部

〒663-8558 兵庫県西宮市池開町6-46
TEL 0798-47-1212 <http://www.mukogawa-u.ac.jp/>

自然とのふれあいを大切に、大地からの贈り物

EARTH MATTERS®

アースマターズ



プリザーブド & ドライフラワー

株式会社 **大地農園**

〒669-3154 兵庫県丹波市山南町工業団地内

TEL. (0795) 77-2311 FAX. (0795) 77-2318

<http://www.ohchi-n.co.jp/>



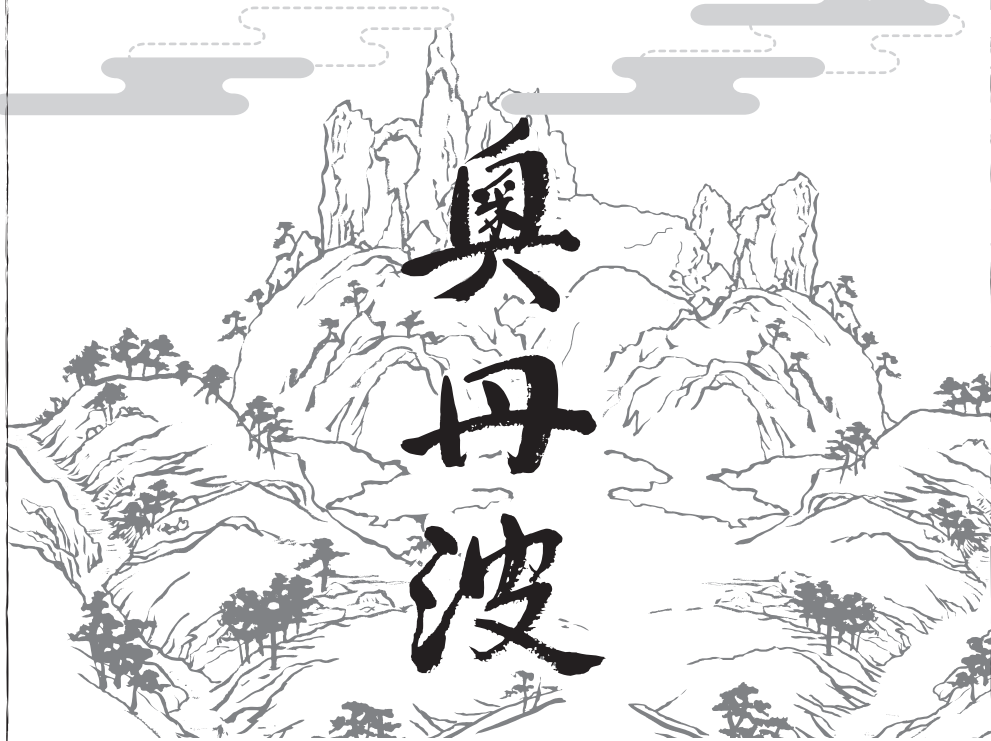
facebook

奥丹波蔵元 山名酒造

当家は元々源氏の総大将、頼朝に付き従った関東武士で、室町時代に応仁の乱で京の都を騒がせた山名宗全の血筋。その後、一族内の争いを逃れて領地を離れ、春日町の興禅寺付近で船川姓に変えて潜んでいたが、一七一六年（享保元年）に現在の市島町上田の地に移り、元の山名姓に戻したのが遠祖の始まりと伝わります。

蔵にある古文書のひとつに、天皇が即位した大嘗祭に奉納米を献上し、宮中から賜った「宝船」を描いたものがあります。カミダ（上田）は神田の呼称が転じたとも言われ、このように稲作に恵まれた環境のもと代々酒造りを生業にして十一代目、平成二十八年で創業三百年となりました。

江戸時代までは「千歳」、明治維新になり「萬（万）歳」、そして平成に入って「奥丹波」と酒銘を変えて仕込み続けて参りました。



奥丹波

www.okutamba.co.jp

▶ 文具・事務用品・高級筆記具・書道用品・印章・ゴム印



新・文具館 柏原本店
Dear Juno
リニューアルしました！

新文具館

新・文具館 柏原本店 (1F)

☎ 0795-72-1223

<店舗直通>

▶ 生活雑貨・インテリア雑貨・ギフト用品・キッチン雑貨・バス用品



Dear Juno (2F)

☎ 0795-72-1223

<店舗直通 (新・文具館 共通)>

▶ OA機器・オフィス家具・事務用品・文具通販

TSP 株式会社土田商事

代表取締役 土田博幸

☎ 0795-72-1117

<営業部直通>

〒669-3311 兵庫県丹波市柏原町母坪409-1

<http://www.tsp-group.jp>

山林をクリエイティブに

一般建築用材・内外装材製造販売
山林再生事業/住宅用地分譲販売



地域の山を守りながら、未来に残したい
くらしの景色を守る木づくりを進めております。

木の事なら住宅や店舗から神社仏閣まで
まるごとお任せください。

〒669-3821 丹波市青垣町桧倉 323-3
TEL:0795-87-5216 FAX:0795-87-5446

<http://www.mokuei.co.jp> 



富士山のバナジウム天然水
(富士山の銘水)

京都ナチュラルミネラル天然水
(京都丹波の銘水)

大分のゲルマニウム天然水
(大分天領の銘水)

島根金城の華アルカリイオン天然水
モンドセレクション金賞



採水地のある富士山が世界遺産登録



丹波より全国へ展開中!

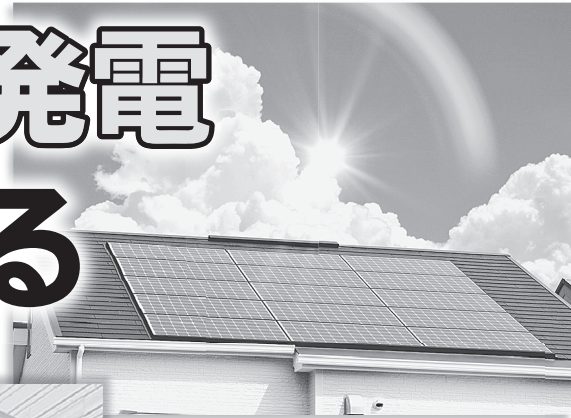
全国製造総発売元

株式会社 オーケンウォーター

よ い み ず
TEL0795-70-4132 ☎0120-041-999

詳しくは

太陽光発電 電気を創る



蓄電池 電気を 蓄える

頭金 **0**円で設置できる太陽光発電
無料お見積りご依頼で



プレゼント!!



新電力バンク
兵庫北支部

使用量に応じて

電気を限界まで

安価でご提供!!

電気料金 **最大** **22%**削減

切替まで全て無料!

関西電力管内 従量電灯A契約・B契約・低圧・高圧契約が割引対象!



株式会社 **グリーンライフコーポレーション**



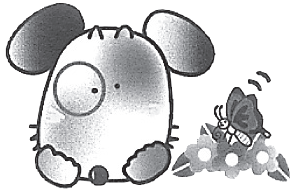
0120-797-600

グリーンライフコーポレーション

検索

本社 JR柏原駅前 丹波市柏原町柏原183-3 丹波ゆめタウン店/市島ショールーム

あなたの住まいのパートナー



不動産の マツイ

丹波市・篠山市の不動産のことなら
不動産のマツイにお任せください！

- 売土地
- 売戸建
- 分譲地
- 賃貸（住居）
- 賃貸（事業用）
- 駐車場・ガレージ



査定・賃貸管理・不動産コンサルティング・リフォーム承ります！
★ いつでもお気軽にご相談下さい ★

ホームページに物件掲載しています！ <http://www.2103-m.com>

不動産のマツイ

検索

← 「不動産のマツイ」で検索！

QRコードでもアクセス可能！→



株式会社 松井商事

兵庫県知事（9）第750049号

定休日：無（年末年始・盆は休業）

営業時間：午前9時～午後7時

本社

丹波市柏原町南多田207-1

TEL：0795-72-2103

FAX：72-2109

丹波市・篠山市住宅情報センター

丹波市柏原町柏原3088-1

TEL：0795-73-2103

FAX：73-2109

篠山駅前営業所

篠山市大沢二丁目9-3

TEL：079-594-2103

FAX：594-2107



不動産のことなら 何でもお気軽に!

 土地と住まいの相談室
オフィス キムラ 株式会社

● <http://www.office-kimura.co.jp> ● E-mail kimura@lily.ocn.ne.jp

● 本 店 ●

〒669-3465
兵庫県丹波市氷上町横田136番地5
TEL (0795) 80-1500
FAX (0795) 80-1501

● **エイガル** NW丹波店 ●

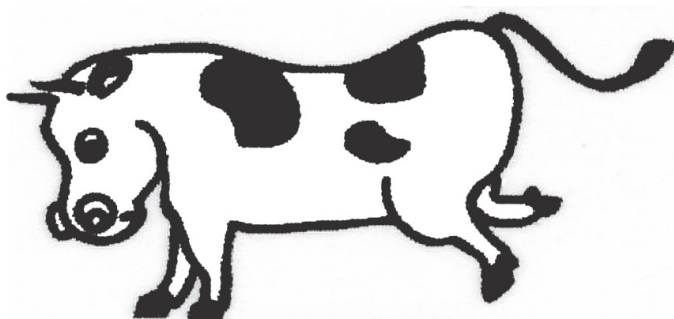
〒669-3465
兵庫県丹波市氷上町横田136番地5
TEL (0795) 82-1550
FAX (0795) 82-6700

● 篠山店 ●

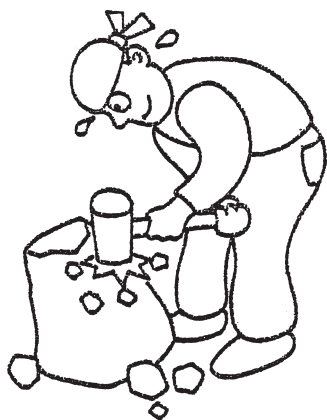
〒669-2205
兵庫県篠山市網掛395番地1
TEL (079) 590-1050
FAX (079) 590-1006

富田畜産

代表 富田信孝



〒669-3603 兵庫県丹波市氷上町西中 44-1
TEL(0795)82-1304
FAX(0795)82-1295



あなたの町の
「石屋さん」…
そんな石屋を
めざしています!!

石の事なら何でもお気軽にご相談ください。

墓石・霊園・建築石材・造園石材

(株) 丹波総合石材

代表取締役 堀 公 二

い し や は こ こ よ

 **0120-1480-54**

工場・事務所 TEL0795-72-3032

FAX0795-72-4343

★弊社ホームページは で!

大和

氷上町石生水分札

TEL(0795)8216010
FAX(0795)8216630



丹波
k i s a k u

k i s a k u

ご予算に応じます。

丹波市柏原町柏原77-1(柏原駅前)

電話 0795-72-1044

<http://www.tanba-kisaku.jp>



たんば黎明館

ル・クロ丹波邸

(お箸で食べるフランス料理)

各種宴会ご案内

同窓会・歓送迎会・各種お祝い

4名～60名様(1階個室、2階宴会場完備)
送迎付きプランやお客様のご予算に応じてご相談承ります

基本プラン(基本2時間)

★コース・テーブルビュッフェ・ビュッフェで提供出来ます。

Aプラン…お一人様 **5,800円**

前菜、お魚料理、お肉料理、デザート、コーヒー、パン

Bプラン…お一人様 **7,500円**

アミューズ、冷前菜、温前菜、お魚料理、お肉料理、デザート、コーヒー、パン

Cプラン…お一人様 **9,500円**

旬の高級食材を使ったシェフお勧め特別フルコース

*全てのプランにフリードリンク(ビール、ノンアルコールビール、ワイン(赤・白)/ソフトドリンク)が含まれます。

ル・クロ丹波邸 コースメニュー

●ランチメニュー

- ・ブティコース 1,950円
- ・ル・クロコース 2,950円
- ・タンバコース 3,600円
- ・シェフスペシャル 5,200円

アラカルト(単品)
430円～

●ディナーメニュー

- ・ル・クロコース 5,400円
- ・ブイヤベースコース 4,400円
- ・シェフスペシャル 7,100円

ドリンク
590円～

※アミューズ(お付きだし)代として
600円別途頂きます。

●お祝い事など気軽にお問い合わせ下さい。スタッフ一同でお祝いさせていただきます。



ル・クロ丹波邸

Le Clos

〒669-3309

丹波市柏原町柏原688-3

●ランチ

11:30～15:00 (L.O.14:00)

●ディナー

17:30～22:30 (L.O.21:30)

ル・クロ丹波邸では
結婚式も出来ます

TEL/FAX0795-73-0096

休 水曜日〔祝日の場合は営業〕

2F

タンバール(ダイニングカフェ) \ 平日限定ランチバイキング開催中/

■ランチバイキング 950円 お料理12種、デザート、コーヒー、紅茶

※価格はすべて税込み

JXTGグループ

EMG

有田産業株式会社

代表取締役 **有田 秀雄**

〒553-0002 大阪市福島区鷺洲3丁目1-38

TEL (06) 6451-1649 (代表)

FAX (06) 6451-0580



有限会社 エス・ディー

みなさまの



信頼感 と 顔の見える 安心感

生命保険

終身保険

定期保険

個人年金保険

医療保険

がん保険

火災保険



自動車保険



けがの保険



賠償責任

など

損害保険・生命保険は
エス・ディーにご用命ください

当社は関西丹波市郷友会の
青少年健全育成に協力しています。

各種保険の内容や
事故対応について
何なりとご相談下さい！



東京海上日動火災保険株式会社 損害保険シャパン日本興亜株式会社 代理店

有限会社 エス・ディー 担当：嶋田

〒550-0013 大阪市西区新町2丁目15番地27号 TEL 06-6539-3229

ザンキン B&G 株式会社



代表取締役社長

濱岡 哲夫

常務取締役

田 晴行

〒550-0013 大阪市西区新町2丁目15番27号

TEL (06) 6539-3281 FAX (06) 6539-3238

建設業者登録	国土交通大臣 第21287号
一級建築士事務所登録	大阪府知事 第5916号
宅地建物取引業者登録	大阪府知事 第41184号

建設事業部（ビルドB） 農芸施設事業部（グリーンハウスG）

- ・ 建築工事の設計及び施工請負
- ・ 不動産の売買及び仲介
- ・ 農業用施設の設計及び施工請負
- ・ 二段式駐車装置の施工販売
- ・ 太陽光発電システムの設計及び施工請負

本社、西部営業所、羽生事業所、沖縄出張所



丹波新聞

伝えたい

届けたい

「丹波竜」の原寸大全身骨格模型

国内最大級の植物食恐竜の骨格模型。

丹波竜化石工房「ちーたんの館」に展示されている。

体長約15 m、体高約3.6 mで、約300個の骨格模型でできている。

株式会社 丹波新聞社

〒669-3309 丹波市柏原町柏原201
tel.0795-72-0530 fax.0795-72-1956

丹波新聞

検索 

週2回(日・木)発行 1ヶ月1,255円(郵送料205円)

おもい
私たちの念は、丹波素材で奏でる「ライブ ステージ」



丹波素材のスイーツ
丹波特産品の和洋菓子
夢の里やながわ本店

丹波の心を伝える—
丹波伝心

夢の里 やながわ

風丹
土波
TAMBAFU-DO
The Sweetness of Nature

株式会社やながわ 代表取締役 柳川 拓三

本店

福知山店

阪神店

兵庫県丹波市春日町野上野920
TEL 0795-74-0123
営業時間 10:00▶18:00
定休日 木曜日

京都府福知山市駅前町343和田ビル1階
TEL 0773-22-2840
営業時間 10:00▶19:00
定休日 木曜日

大阪府大阪市北区梅田1-13-13
阪神百貨店B1洋菓子売り場
TEL 06-6348-8580

<http://tamba-yanagawa.co.jp>

ヤマウチ製菓 株式会社

代表取締役社長 岡田 和義

〒555-0024 大阪市西淀川区野里一丁目32番22号
TEL 06-6472-1064 FAX 06-6472-9933

創業明治25年(1892年)

岡林寫真館

本店 丹波市柏原町柏原JR柏原駅前
TEL 0795-72-0033 FAX 0795-72-1148
コモーレ店 丹波市柏原町母坪コモーレ丹波の森内
TEL・FAX 0795-73-1233

.....一度ホームページをご覧ください.....

www.okabayashi.co.jp/

岡林写真館

検索

心豊かな暮らしにご奉仕いたします

仏壇 仏具 位牌 宗教行事用具

創業大正8年

大仏堂

国道175号線と176号線の交差点すぐ

丹波市氷上町横田(コープこうべ柏原店様前)

お電話代無料

0120-2946-37 へお気軽にどうぞ。

FAX 0795-82-5427

兵庫県・京都府下18店舗展開中

作業服・作業用品専門店

オオツキはユニフォームから作業用品まで、働く職場をがっちりサポートする会社です。

ラジオ関西・FM“805 たんば”でCMソング放送中！

会員カード(ダルマカード)発行中!!

- ◎毎月 9日・19日・29日はポイント 2 倍デー！
- ◎毎週水曜日レディースデー！（女性の方はポイント2倍）



株式会社

オオツキ

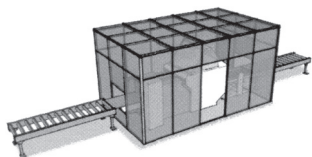
兵庫県丹波市春日町新才518 TEL：0795-74-0179 FAX：0795-74-2833

<http://www.otsuki.ne.jp> e-mail info@otsuki.ne.jp



断熱と防音で「あなたらしい住環境」を創造する

谷水加工板工業株式会社



不燃系防音室パナム「ガード」

兵庫県丹波市氷上町賀茂 1 4 5 7 番地 1
TEL: 0795-82-2117

たにみず加工

検索



介護付有料老人ホーム
さわやかひめじ館
 平成30年3月開所予定

設計・監理
清水一級建築設計事務所
 一級建築士 **清水昭景**

〒669-3131 兵庫県丹波市山南町谷川714-2
 携 帯: 090-3429-8097
 TEL・FAX: 0795-77-0369
 E-mail: shimizusekkei0369@athena.ocn.jp

本格会席・創作料理の店



丹南茶寮

春は山菜、夏は川魚、

秋は栗・松茸、冬は山の芋・・・

丹波の四季をお楽しみ下さい

tannansaryou.com

ミニ同窓会・ご商談にお気軽にどうぞ

和食膳所 **丹南茶寮**

〒669-2214 兵庫県篠山市味間新92-4

☎(079)590-1020

【駐 車 場】
 有り (無料) -7 台まで
 【営業時間】 定休日翌日は17時より
 お昼の御食事
 11:30~13:30
 夕晩の御食事
 17:00~22:00
 【定 休 日】 水曜
 ※第4木曜日(変更になる場合有)



代 表 鷺尾英紀

たんばコミュニティエフエム

市民のための！ 市民による……
放送局です！

FM80.5 MHz

丹波市内で毎日、朝6時から夜10時まで
放送中です。



FM80.5 MHz

805たんば

特定非営利活動法人 たんばコミュニティネットワーク
〒669-3461 丹波市氷上町市辺 683
Tel.0795-82-1881 Fax.0795-78-9832 Mail:mail@tanba.info

●インターネットラジオ
(サイマル放送)

または

●スマートフォン
(無料アプリ)

でも聴けます。

皆様のご支援やご参加を
お願いいたします。

詳しくはホームページ

<http://805.tanba.info>
をご覧ください。



会誌「山ざる」48号・年1回発行

柏原町・谷書店にてお求めいただけます。
1冊 ¥500円

関東氷上郷友会

心と心のおつきあい

ふるさと丹波と関東地域の丹波出身者の心をつなぐ

会誌「やまざる」にご投稿お待ちしております

お問い合わせは事務局迄

最近関東以北の地域に越された方、ご連絡下さい。

事務局

〒351-0014 埼玉県朝霞市膝折町 4-4-30

TEL 048-460-1601 FAX 048-460-2397

ホームページ <http://pcc-taiyo.co.jp/hikami>

関西丹波市郷友会に入会しませんか

関西丹波市郷友会は、旧氷上郡出身者により明治32年(1899)年に創設され、同郷の人々の親睦と郷土の青少年の育成のために、長年に渡って様々な活動を行ってきました。

しかしながら、時代の変遷とともに、会員の高齢化や会員数の減少など本会を取り巻く状況は大きく変わってきています。この時期に当たり役員会では、伝統に甘んじて惰性的に活動を進めるのではなく、丹波市の将来に真に貢献できる方向で活性化を図る必要があるとの認識のもと、平成28年度より新たな試みを始めました。

今回2号目となった会報誌「たんば」の発刊、年次総会の地元での開催、さらには今回の地域医療講演会の開催など様々な方策を企画しております。出身者だけでなく、地元在住の方々にも大いに関わっていただいて情報交換したり議論し合うことにより、人口減少などの困難に直面する丹波市の課題解決に向けて、いささかでもお役に立てる会に発展できればと、願っております。

どうか皆様にも加わっていただき、お力添えをくださいますよう、よろしく願い申し上げます。丹波市出身でなくても、何らかのご縁があって丹波に関心を持たれる方ならどなたでも歓迎いたします。

年会費3000円を納入いただきましたら、年次総会のご案内、会報「たんば」の送付ほか、本会が催すイベントのお知らせ等々をいたします。

次ページの入会申込書にお名前、住所、電話番号、年齢などを明記してお申し込みください。

寄稿を歓迎します 本誌を郵送料ご負担で送ります。

本誌は年1回発行予定です。次号への寄稿を歓迎いたします。

ご希望の方は会報委員長 山口直樹宛て(0795-82-1651)にご連絡ください。

また本誌(無料)をご希望の方は、下記の事務局(丹波市以外に在住の方)または丹波新聞社(丹波市在住の方)まで郵送料300円(切手可)を添えてお申し込み下さい。

たんば 第2号

2017年11月1日発行

発行 関西丹波市郷友会(会長 有田秀雄)
〒550-0013 大阪市西区新町2-15-27
サンキン株式会社 内
Tel.06(6539)3201
Fax.06(6539)3231

印刷 株式会社 丹波新聞社 Tel.0795(72)0530

年 月 日

関西丹波市郷友会入会申込書

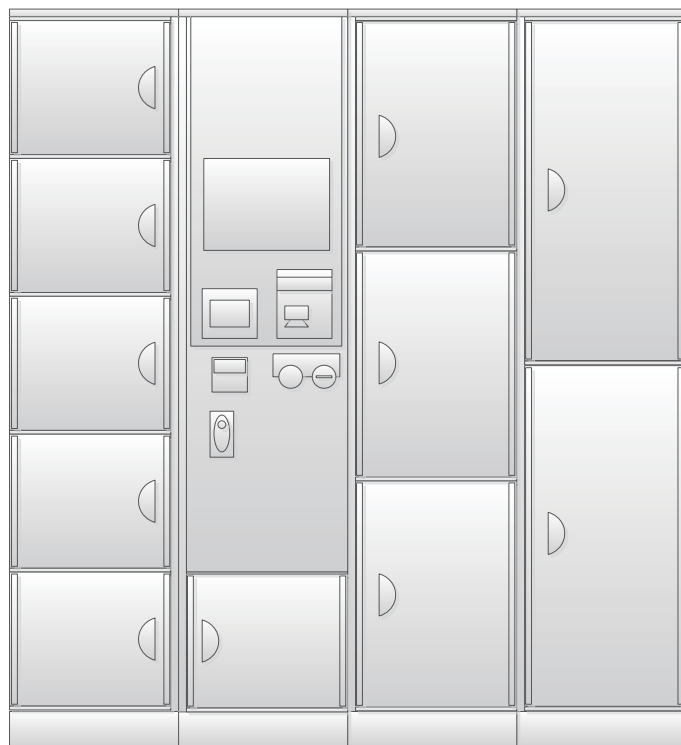
ふりがな	
氏 名	
〒 番 号	
現 住 所	
電 話 番 号	
年 齢	歳
出 身 地 又は縁故地	丹波市 町
紹介者氏名 (会員氏名)	
紹介者がいない場合は、以下にお書き下さい	
丹波市との 関わり	
勤 務 先	会社名
	住所・電話

上記の様式をコピーまたは切り取って、FAX または郵送して下さい。
届き次第、入金振込票をお送りします。会費は年3,000円。入会費は不要です。

関西丹波市郷友会 事務局

〒550-0013 大阪市西区新町2-15-27 サンキン株式会社内
電話：06-6539-3201 FAX：06-6539-3231

お客様の手荷物保管 スペースを創造して50年。



since

1966 → Next

コインロッカーの販売・オペレート

丸十ロッカー株式会社

代表取締役 田 恭子

〒664-0858 兵庫県伊丹市西台 4-1-26

TEL:072-772-2654 FAX:072-770-5553

URL:<http://www.marujulocker.co.jp>

契約先 42 社

設置ロケーション数 537カ所

設置台数 4,258 台

設置口数 15,714 口

2016年現在



ガンキン株式会社



真に役立つ存在であり続けたい

代表取締役社長 田 貴 晴

代表取締役副社長 水 口 純 二

取締役会長 田 晴 重

取締役相談役 玉 置 克 臣

【当社製品】

- 冷間引抜鋼管
- 家庭用物置
- 物流パレット
- 立体駐車装置
- 車止め